断罪してください

津名友香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断罪してください

【Nコード】

N0465Q

【作者名】

津名友香

【あらすじ】

先輩は悲しそうな、困ったような顔をしていた。かわいそうなくらいに情けない表情だ。どうしてそんな顔をするのだろうか？ 今かわいそうなのは間違はなく私のはずなのに。私は怒りとも、悲しみとも言えない感情をどこにぶつけたら良いのか分からなかった。大声を出して泣いたり、ものを投げたりすればすつきりするのかもしれないが、そんなことはしなかった。ただ、右手でセーラー服のスカートを強く握っただけだ。「久我山さん」 そのとき先輩の静かな声が響いた。同時に再び腕を捕まれる感覚。先ほどとは全く異

なる強い力で引っ張られる。気が付くと私は山辺先輩に抱き寄せられる格好になっていた。今までで確実に一番山辺先輩に近い位置だ。耳元で聞こえる呼吸や、心臓の鼓動がひどく現実離れしているように感じた。

一章 春（1）

「なあ、頼むよ」

「嫌です」

「そう言わずにさあ、考えてみてよ」

私は目の前のうるさい男にうんざりしていた。もうかれこれ十分間はこんなやりとりをしている。

「新入生が入ってくれないとうちは廃部になっちまうんだよ。大丈夫、お前声かわいいし、俺のスカウトは確実だ」

目の前にいるのは担任の青田先生だ。担当科目は英語で、煙草の匂いのせいで生徒達からは嫌われている。

私は先生から香る特有の匂いに顔をしかめた。

先生は、先ほどから執拗に自身が顧問を務める放送部への入部を強く勧めて来ている。

「他にもかわいい声の子はいますよ。頑張って探してみてください」
私は部活動など興味がなかった。

五月のゴールデンウィークとやらが終わり、小学生のときよりも少し難しい授業にも慣れて来た頃、クラスの友人達はもうすでに部活動を決めていた。内申書に響くのは分かっていたが、どうしても部活動というものは馴れ合いに見えてしまい仮入部すらできないのだ。

放課後の廊下には西日が射していた。そのせいで、まだ五月だというのに暑いと感じてしまう。ショートカットの私は首筋がじりじりと焼ける感覚が嫌いだった。

「他にも目を付けていたやつはいたよ。D組の中野とか、でもあいつもうバトン部に入ってたんだよ。他にもC組の高橋とか赤石とか、A組は駄目なやつばかりだし……」

先生は聞いてもいないのにベラベラと声のかわいらしい人物を挙げ始めた。誰も彼も、スカウトする前に他の部活動に入部している

らしかった。

「はあ、そうですか」

別に急いでいるわけではないが、私はこんな西日の射し込んだ暑い廊下で長話を聞くほど暇ではない。適当に相槌を打ち下駄箱へと歩き出した。

「考えておいてくれよー」

吹奏楽部の人達が楽器を奏でる音に混じって先生の声が背後から聞こえた。

「はあ？ 放送部」

「うん、なんか廃部になりそうなんだって」

次の日の朝、私はとりあえず友人の葵に相談してみることにした。クラスが違うので気兼ねなく相談できる。教室が遠いというのは問題があるが、私は階の異なる彼女のいる教室まで足を向けたのだ。

この学校では部員が三人以下の部活動は廃部になってしまう。放送部は、私が入部すればギリギリ三人の部員を確保したことになるのだろう。

葵は私と同じく部活動をしていないが、明るい性格とかわいらしい容姿のおかげで友人が多い。私はその中の一人でしかないのだ。その上まだ入学して二ヶ月足らずだというのに、学年の違う先輩にも知り合いがいるらしい。

だから学校の噂話には人一倍詳しい。顔が広いというのは何かと得だ。私は放送部に何か嫌な噂がないか、葵に探りを入れようと考えていた。

「青田先生に誘われたのかー。確かF組の担任だったよね」

「うん、私のクラスの担任だよ。やっぱり悪い噂とかある？」

青田先生は生徒達からの評判がよろしくない。煙草の匂いのせいだけではなく、口調も悪いからだ。一部ではロリータコンプレックスなのではないかという変態疑惑まである。それに宿題をたくさん出す。

私もあまり青田先生のことには好きではない。そんな私の思いを知つてか知らでか葵は涼しい顔で答えた。

「まあ、青田先生は悪い人じゃないと思うよ。ちょっと変わってるけどね」

葵はそこで一旦言葉を切った。唇を舐め、何か考えているような顔を浮かべる。

朝のうるさい廊下のはずなのに、私にはここが水を打ったように静かになった気がした。

「まあ、調べといてあげても良いよ。私そついうの得意だし」

そして葵は「ただし」と言いながら人差し指を付きだし、言葉を続けた。

「ただし、梢の暴露話を一つ聞かせてもらおうかな」

その言葉を聞き、私は驚くと同時に笑いが込み上げて来た。私に人様に話すような立派な暴露話などない。

実はバツイチでした。とか、実は男です。などといったインパクトのある衝撃的事実など、私は一切持っていない。私はごく普通の、どこにでもいる中学一年生なのだ。

「やだなー、そんな大層な暴露話なんてないよ」

私が笑いながら葵に返事をする、葵は付き出していた人差し指を引っ込め、何か考えるように頭を掻いた。

「うーん。じゃあ好きな人とかいないの？ いたら教えてよ」

その言葉を聞いたとき、私は心臓が口から出てしまうのではないかと思うくらい驚いた。葵の言う通り、好きな人がいたからだ。

「えっ、い、いないし。いたとしても言わないし」

自分でも分かりやすく動揺した声を出していることが分かった。なんだか自分が惨めに思えてくる。

「ふーん。いるんだ、なんか意外。で、誰なの？」

私は言わないと言っているのに葵はそんなことを言ってきた。

些か図々しくはないだろうか？ しかしまあ、違うクラスの葵に教えたところで、私に何か被害が及ぶわけではない。上手くすれば

葵が協力してくれるかもしれない。なんせ葵は顔が広いのだから。私は辺りを見渡して、近くに誰もいないことを確認し、声を小さくして囁くように言った。

「誰にも言わない？」

「モチのロンだよ。で、誰なの？」

私はいきなり死語を話し出した葵に面食らったが、当の本人の顔は真面目そのものだった。

「……三年C組の山辺先輩」

あー、もう言ってしまった。廊下には西日が射していないというのに、額に汗が噴出すのを感じた。

初めて山辺先輩に会ったのは、実験の授業の教室移動のときだった。落とした教科書に気付かなかった私に話し掛けてくれたのだ。

少し憂いを含んだ笑顔、何て良い人なのだろうと思ったものだから、きつと誰に対しても親切なのだろう。

「ちょっと待ってね、三 C の山辺か。『や』は結構後ろのほうだなー」

葵は鞆から分厚い手帳を取り出してパラパラと捲っている。いったい何をしているのだろう？

「あーいたいた、三年C組山辺孝之。頭は良いし、運動もまあまあ、身長が高くて、眼鏡を掛けると。へー良いんじゃない。あっ、駄目だ。容姿がバツ印になってる」

葵の手帳には何が書かれているのだろう？ 全校生徒の個人情報と、悪口の嵐だと考えると恐ろしい。しかし、山辺先輩はそこまで見た目が悪いとは思わない。価値観の違いというものだろうか？

私が首を傾げていると、葵は手帳に向けられている目を大きく見開いた。その直後、ため息混じりに呟く。

「所属、放送部……」

「ん？ 今何て？」

私は思わず聞き返した。放送部と聞こえたような気がする。廃部寸前で、顧問が青田先生の。

私は放心状態になった。あのやさしい笑顔が頭を掠める。

そのとき、予鈴のチャイムが鳴る音がした。生徒達を時間で区切るチャイムの音だ。

「まあ、私の好みじゃないけど、応援してあげても良いよ。じゃ、またねー」

葵は私の問いには答えず、意味深な笑みを浮かべながら手帳を鞆にしまい、教室へ戻って行った。

なんとなく馬鹿にされているような気がしなくてもないが、私は清々しい気分だった。

F組の教室は三階の端にある。玄関から一番遠いので他の組の人と比べると、損をした気分になる。

私は朝のホームルームの時間、ずっと放送部について考えていた。廃部寸前の弱小クラブだが、山辺先輩がいるなら入ってみてもいいかもしれない。昼休みになったら、入部届けを貰ってこよう。

そう決めたあとは、午前中の授業が退屈だった。早く入部したくて堪らなかったからだ。いつもは楽しいはずの得意な数学の授業も、どういうわけか身が入らなかった。窓側の席だったら外の景色を楽しみながら乗り切ることができるのに、生憎私は廊下側の席だった。私は自分の運のなさを呪いたくなくなった。

どれだけこの瞬間を待ったことだろう。私は昼休みのチャイムが鳴るとすぐに、職員室へと走った。

廊下の喧騒も、朝のそれとは比べ物にならないほどのものだった。人の行き来も、朝より多い。

私は人にぶつからないように気をつけながら、階段を駆け下り、職員室を目指した。職員室のある二階へ降りると、心なしか先ほどよりも静かになったような気がした。二階は職員室の他に、三年生の教室もある。やはり下級生の廊下とは雰囲気落ち着いている感じがする。

私はゆっくりと職員室の扉を開けた。ノックをしてもどうせ中からは聞こえないのだから、テスト期間意外は勝手に開けても良いこ

とになっているのだ。

職員室の中では、お昼ご飯を食べている先生、テストの採点をしている先生、良く分からないがパソコンをいじっている先生など、各々が自由に行動していた。質問をしている生徒もいる。

私は部屋を見渡し、青田先生を探すとすぐに駆け寄った。

「あのう」

「おう、なんだよ久我山。放送部に入る気になったのか」

先生は、冗談交じりにそう言った。きっと私が本当に入部する気になったとはすこしも思っていないのだろう。

「はい、私入部します」

私がそう答えると、先生は驚いた顔でこちらを見た。そしてすぐに笑みを浮かべる。それほど廃部にしたくなかったのだろう。

「はい。なので入部届けとやらを書きます」

昼休みの職員室。この時間はクラシックではなくロックンロールの音楽が流れている。確か昼休みの放送は、放送部の仕事だったはずだ。もしかすると山辺先輩の趣味なのかもしれない。

しかしながら、食事時の音楽にしては重すぎるような気もする。

「おう、そうか。じゃあこれに書いて生徒会の誰かに渡してくれ。

それと、来週の月曜日の朝、いつもより早く放送室に来て朝の放送をしてくれ。誰か説明する奴見つけとくから」

青田先生は左手に煙草を持ちながら右手で机の引き出しを開け、

『入部届け』と書かれた紙を渡した。

「ありがとうございます」

私はそれを受け取り、適等に返事をする足早に職員室をあとにした。真面目な話、あの煙草の匂いは法律かなにかで取り締まって欲しいほど酷い。

廊下に出た私は、制服のポケットからボールペンを取り出して壁に紙を押し付けながら入部届けに名前を記入した。不恰好な字になっってしまったが、そんなことは気にしない。早速、生徒会の誰かに渡しに行かなくては！

私は生徒会室に向かいながら、放送部の部員について考えていた。葵の、あの分厚い手帳が何なのかは分からないが、山辺先輩が放送部員という情報はほぼ確実だろう。部員が三人以下だと廃部になる計算だから、あと一人は放送部員がいるはずだ。

さつき青田先生に聞いておけば良かった。

私は少し後悔しながら、生徒会室のドアを叩いた。

誰かいるだろうか？ もし会議の最中だったらどうしよう。

ドアを叩いたあとに、そんな心配をしても仕方がない。なかば開き直りながらも、自分から部屋に入ろうとするほど勇気のない私は、ドアが開かれるのを静かに待った。

「どちら様」

ゆっくりとドアが開かれ、低い声が聞こえて来た。顔を上げると、背の高い詰襟の学生服を着た人物が立っていた。

入学式のときに生徒代表として挨拶をしていた人だ。

確か、生徒会長さんだったと記憶している。

「えっと、入部届けを出しに来ました」

私は少し緊張した声で答え、握りしめていた紙を手渡した。

会長さんは、私の渡した入部届けに丁寧に目を通して

することのない私は、ドアの向こうの生徒会室に目を向けた。

こざつぱりした部屋。大きな細長い机と、いくつかのパイプ椅子

しか見えなかった。どうやら会議中ではなかったようだ。

「……放送部か。これで廃部にならなくて済むな」

会長さんは入部届けから目を放すとそう言った。なんだか廃部になつて欲しいというような口振りだ。

放送部に何か悪い噂でもあるのだろうか？

私が訝しんでいると、会長さんはドアを閉めようとした。

「あ、あの、ちょっと待ってください」

私は咄嗟に声を発した。会長さんの態度が気になつたからだ。

「何だ？ 私も忙しいから、用があるなら手短に頼む」

腕時計に目をやりながら、会長さんは不機嫌な声を出す。

「放送部の部員ってこれで三人ですよね」

「だから？」

会長さんは強い口調で言い、乱暴に自身の後頭部を掻いた。余程受験勉強で疲れているのだろう。

「私と、三年の山辺先輩と、あと誰がいますか？」

私が尋ねると、会長さんは明らかに目を逸らした。困った表情を浮かべながら後頭部を掻きむしっていた右手で、今度は優しく頬を掻く。

「二年生の坂本さん」

ぶつきらばうにそう言うと、生徒会室のドアを大きな音をたてながら閉めた。

私は、生徒会室の前で眉をひそめた。いったい何なのだろうあの人は、いくら生徒会長だからってあの態度はあんまりではないか？ さつきまであんなに浮ついていた気持ちがあんまりのせいで、ひどいものになっちゃった。怒りがふつふつと湧き上がって来る。時計を見ると、もうあまり休み時間は残されていない。私は急いで教室へ戻った。さすがに弁当を食べる時間がなくなってしまうのは困る。

午後は、会長さんの態度が原因で最悪の気分のまま授業を受けた。結局弁当も半分しか食べられなかったし、それもこれも会長さんのせいだ。

私は、頭の端で燻っている、行き場のない怒りをどこへやったら良いのか皆目見当がつかなかった。握っているシャープペンシルが折れるかと思うくらい強く握り締めていた。

そうこうしているうちに五時限目が終わった。あと一時間で家に帰れる。時間割を確認すると、六時限目は日本史だった。

日本史の先生は若い女の先生だったが、生徒に質問をすることなく授業を進める先生だった。それに宿題も出さないし、テストも簡単に正解できるようなものをつくるという噂だ。それが理由かどうかは分からないが、生徒の人気は高い。男女関係なく人気のある先

生は彼女くらいなものだろう。

私は六時限目が日本史で良かったと、小さくため息を吐いた。た
いした理由はないが、今日一日は何かと疲れる日だった。

やがてチャイムが鳴り、授業が開始された。先生の時折高くなる
声はとても心地が良い。モーツアルトの音楽を聴いたときのように、
眠くなってしまふ作用があるのだ。

私は必死で眠気を抑え、山辺先輩のことを考えてみた。教科書を
拾ってくれた先輩。私は何と言って親しくなるうか考えてみるこ
とにした。

ノートの隅にシャープペンシルの先を当てる。何か書こうと考
えるのだが、面白いくらいに何も思い浮かばない。

一行目には何を書いたら良いのだろうか？ 先輩は私のことを覚え
ているかどうかさえ分からない。とりあえず自己紹介から始めれば
良いのだろうか？ いや、気候から始めるのがマナーだった気もす
る。とすると、本日はお日柄も良く〜と始めるのが懸命なのだろう
か？

私はシャープペンシルを握りしめたまま、たっぷり一時間は考え
てこんでいたのに、結局一行も書けなかった。気が付くとシャープ
ペンシルを握った右の掌は、汗でじつとりと湿っていた。

掃除が終わったあとの教室は静かだった。オレンジ色の夕焼けが
差し込み、幻想的な雰囲気醸し出す。そんな風景は、非現実の世
界に思えた。

「えー、入部したあ？」

放課後は葵と話をすることができた。廊下での立ち話は疲れるの
で、葵から私の教室に出向いてくれたのだ。

誰もいない教室は静かで、外から運動部の人達の声が聞こえるだ
けだった。

私はあのときの会長さんの態度を気にしつつも、山辺先輩と同じ部
活動に入部できた事実に興奮していた。

「うん、来週の朝、部室に来てって言われた」

無意識に顔が綻んでしまう。そんな私をよそに、葵は真剣な顔をしていた。

「私、あれから調べただけど、放送部は止めた方が良いかも……」
葵は机に肘をつきながら、小さな声で言った。さつきから真剣な顔を崩さない。

本当に何か悪い噂でもあるのだろうか？ 私は、会長さんの台詞を思い出した。

「それって、二年生の坂本さんのこと？」

私が尋ねると、葵は一瞬だけ驚いたような顔をしたあと、すぐにまた真面目な顔に戻った。机に付いていた腕を、膝の上に乗せる。

「知ってたんだ。まあ有名だもんね。一応家出ってことになってるらしいよ」

葵の言葉に、今度は私が驚く番だった。坂本さんという人物は、放送部員ではないのだろうか？

「えっ？ 家出ってどういうこと？ 坂本さんはこの学校の二年生でしょ」

私の頭は混乱していた。家出ということは、行方不明にでもなっているのだろうか？

「あれ、やっぱり知らないの？ これ苦労して聞き出した情報なんだけど、去年の文化祭の日に坂本みずきって生徒がいなくなっただけだ。一応家出ってことになってるけど、当時は新聞とかテレビでも報道されたいよ。私あんまり覚えてないけど……それから放送部にはあんまり良い噂がないみたい」

葵の言葉に私はさらに驚いた。確かに、行方不明になった生徒が所属する部活動に入ろうという物好きは少ないだろう。まして報道もされたなら迷惑した人もいるはずだ。警察に事情聴取された人もいるかもしれない。会長さんのあの態度も納得できる。

つまるところ、放送部はあまり関わり合いになりたくない部活動として知られているわけか。

葵はきつと、親切心でこのことを教えてくれたのだと思う。警察沙汰になった事件を教えてくれる先輩も少ないはずだ。それでも苦労して聞き出して、それを私に教えてくれた。

私にだって、悪い噂のある部活動に所属していたくない気持ちはある。しかし私は山辺先輩と同じ部活動に所属していたいのだ。

「そうなんだ。でも私、退部はしないよ。教えてくれてありがとう」
私は葵に笑い掛けながらそう言った。

葵も私の気持ちが分かったのか、真剣だった顔を崩して優しい表情の笑顔を見せた。

「やっぱり、山辺先輩にアタックするため？」

葵は次の瞬間、私の方に身を乗り出し、ニヤニヤと楽しそうに笑った。

その通りではあるのだが、葵の言い方を聞くと、心中穏やかでない。

私が黙っていると、葵は空気を読んだのか「とこえろで」と言っ
て話題を変えた。

「ところで、最近私落語に嵌ってるんだよね。『崇徳院』とか最高だよ」

「へえ、どんな話なの？」

私が聞くと、葵はまたニヤニヤと笑いながら答えた。

「そっだなー、純愛系の話だよ。美容院には頻繁に行こうっていう
教訓付きだよ」

び、美容院に行く話しなのか？

私は不思議に思ったが、落語には生憎興味がない。まあ機会があったら聞いてみよう。

一章 春（2）

私が初めての放送をする予定の月曜日の朝は、いつもより一時間以上早く起きてしまった。楽しみで仕方がなかったからだ。山辺先輩と会えるかもしれないのだから緊張もするし、早起きするのは当然のことだ。

いつもよりゆったりと歯を磨き、いつもより丁寧に髪をとかし、何度も時計を確認しながらテレビを眺めた。

そして、普段の登校時刻より三十分早い時間になったことを確認すると、すぐさま家を飛び出した。

意識していないのに、学校へ向かう足は速くなる。普段は少なくとも十五分は掛かる道程を、十分に歩いて来てしまった。

早朝の校庭は、運動部の人すらいない。その光景を見ると、自分が今から誰もいない学校にたった一人で入ろうとしている変質者であるような錯覚に陥った。

それでも私は足の速度を落とすことなく、まっすぐ放送室へと向かった。人気のない廊下を進みながら、私は苦笑した。

なんだか泥棒にでもなった気分だ。

長い廊下を進み、放送室のドアの前に立った。ゆっくりとドアノブに手を掛け、手首を捻り、手前に引っ張る。

「あれ、えーと。最近入部した人？」

放送室には先客がいたようだ。窓からの朝日で顔は良く見えないが、椅子に座っている。

私はかなり早く来たと思ったのだが、それでもなかったのかも知れない。

「あ、はい。久我山梢といいます。よろしく願います」

私は挨拶をすると、放送室の中へと足を進めた。段々と椅子に座っている人物の顔が鮮明に見えて来た。

「山辺孝之です。よろしく」

驚いた。長い夢を見ているのではないかというくらいに上手くことが運びすぎているようにも思えた。

私は先輩の機材を説明する声を聞きながら、必死でノートにメモを取った。一通りの説明が終わると先輩は言いつらそうに言った。

「久我山さんは、朝の放送を担当してもらおうと思います。それと……クラシックは流さないでください」

いったいどうしたことだろう？ クラシック以外の音楽を流してはいけないという話は聞いたことがあるが、クラシックを流してはいけない学校なんて存在するのだろうか？

「それは、校則か何かで決まっていますか？」

私は一応確認してみることにした。もしかしたら、以前問題が起きて禁止になったのかもしれない。私に通っていた小学校では、こつくりさん禁止令が出された時期もあったほどだ。

「いえ、あの。別にいいんですけど……」

先輩は困った顔をしていた。青田先生にでも言われたのだろうか？ どちらにせよ先輩を困らせるのはいけない。

「分かりました。確かにクラシックは眠くなっていけないですよ
ね」

私はそう返事をする、時計を確認して教わったばかりの朝の放送の準備をする。マイクの電源を入れ、大きく深呼吸をした。

「みなさん、おはようございます。朝の放送を始めます。今朝の一曲目は……」

全校放送なんて人生で始めてだった。口の水分はなくなるし、心臓はバクバクと早鐘を打つ。

それでも私は放送を終えることができた。

「最初は緊張するでしょうが、そのうち馴れますよ。それじゃあ」
そう言つと山辺先輩は放送室から出て行こうとした。

「あの、先輩」

私は何を思ったのか山辺先輩を引き止めた。先輩も驚いたような表情を浮かべて振り返る。

「え、ああ、はい。何ですか？ 分からないことでも」

「いえ、あの。この間はありがとうございました」

私の言葉に、先輩は眉をひそめた。あのときのことを覚えていなかったとしても不思議ではない。私は余計なことを言ってしまったのかもしれない。

「……もしかして、教科書ですか？ 別に気にしなくても良いのに」
先輩はそう言うと、今度こそ本当に部室から出て行った。

二章 夏（1）

私は朝の放送を担当するため、放送室兼部室の鍵のスペアを持ち歩いている。職員室に返さなければならぬ鍵は、山辺先輩が持っているらしい。

昼と放課後の放送を担当している山辺先輩に会うことは少なかったが、先輩と同じ部活に入れたということに私は満足していた。朝の早起きも全く苦痛ではなかった。

一度、葵の勧める落語のCDをかけたときはわりと好評だった。放送部がほかの部活から敬遠されているとはいえ、クラスの人はほとんど坂本さんの事件について知らなかったため、私がクラスでの友人をなくすという事態には至らなかった。

じめじめとした六月が終わると、夏の暑さが始まる。半袖のセーラー服でも暑いと感じてしまうほどだ。この学校ではプールがないので、体育の授業で涼むこともできないのだ。四十人近くの生徒の詰まった冷房のない教室で、繰り広げられる授業は拷問に近いものがあった。弱々しく回る扇風機は生ぬるい温度しかもたらしてはくれない。

「それでは、文化祭のミスコンテストの代表を決めたいと思います」
黒板には綺麗な文字で『文化祭、ミスコン』と書かれていた。

六時限目のロングホームルームの時間。クラス委員長の鈴木さんが口を開いた。

夏になってから席代えをして、窓側の一番前の席になった私は、頼杖をつきながらぼんやりと窓の外を眺めていた。夏は陽が落ちるのが遅いので、六時限目だというのに昼間のような明るさだ。

窓から入る冷たい風に感謝していると、大きな入道雲が見えた。近いうちに雨が降るのだろうか？

「誰か立候補か推薦をする人はいますか？ いないなら私がやりますけど」

私の前には青田先生がパイプイスに座っている。面倒臭そうにクラス全体を見ていた。

鈴木さんは、誰も立候補や推薦をしないことを確認すると、満足気に青田先生の方へ顔を向けた。

「それじゃあ、私が出場します」

クラス中からまばらに拍手の音が鳴った。

鈴木さんは相変わらず嬉しそうな顔で席に戻って行った。しかし、これほどまでに分かりやすい人物もそういないだろう。

クラス委員長というのは何でもやりたがるような物好きにしか務まらないのかもしれない。クラスに一人は必ずこういう変わった人間がいるものだ。

青田先生はホームルームの議題が終わったことを確認すると、パイプイスから立ち上がり教壇に登った。

「おー。じゃあまだ時間早いかもしれんが解散としようか。お疲れー」

青田先生はそれだけ言うのと教壇から降り、教室のドアに手を掛けた。すると思いついたように後頭部に手をやり、私の方を振り返った。

「ああ、そうだ。久我山、今日文化祭について話すからあとで部屋にこいよー」

面倒臭そうに語尾を伸ばして話すと、本当に教室から出ていってしまった。

どうせ先生のことだ、自分のクラスだと連絡が楽だなー。とかしよもないことを考えているに違いない。

私は心の中でため息をついたが、文化祭について話し合うということは山辺先輩にも会えることと同じだ。と考え、放課後を楽しみにすることにした。

その日は掃除当番ではなかったので、私は放課後になるとすぐに

放送室へと向かった。

まだ明るい廊下は、掃除当番の生徒もまばらに残っている。階段を下がると、放送室の扉が見えて来た。

「あれ、先生どうしたんですか？」

驚いたことに青田先生は放送室に入らず、扉の前で何をすることもなく立っていた。

どうして中に入らないのだろうか？

「どうしたもこうしたもねーよ。鍵が職員室にないんだよ。多分山辺が持つてるんだろうな。それまでは待つしかない」

青田先生は腕を組み、盛大にため息をついた。小声で「まったくアイツは……」と言っているのが聞こえた。

「鍵だったら私持ってますよ」

私はそう言いながら靴を探る。

しかし、山辺先輩はなぜ職員室に鍵を返していなかったのだろうか？そういうことにはキツチリしていそうな性格だと思つのに……。

私は靴の中から鍵を見つけ出すと、放送室のドアを開けた。部屋の中に足を一步踏み入れた瞬間、ムツとした暑さが私を襲った。

「うわー、暑いですね」

私はそう言いながら部室の窓を開けた。涼しい風が入り込み、気持ちが良い。

部室はたくさん機材がほとんどのスペースを占領していたが、かろうじて教室にある木でできた机と椅子が二つづつ、パイプイス一脚が置かれていた。

私は木造の椅子に座り、靴から出した下敷きで自分を扇いだ。生ぬるい風しか運ばれて来ないが、何もなしよりはずっとマシだ。

「まあ狭いからな、人数が増えたらちゃんとした部室も貰えるんだが。今年は廃部にならなかつただけマシだ」

青田先生はパイプイスに座りながら言った。

私は窓の外を眺めた。まだ明るいけど、もう昼間のような明るさではない。腕時計に目を向けると、午後五時を指していた。

「そういえば、山辺先輩遅いですね」

私が尋ねると、青田先生は小さく頷いて、口を開いた。

「そういえば、久我山。お前この間の中間酷かったぞ。補習にならない程度には頑張れよ」

ギクリとした。私はどうして英語が苦手だ。所有格とか出てくると、訳が分からなくなる。

「……で、でも補習は免れましたよ」

そうだ。赤点である三十点はギリギリ越えていた。しかし授業はどんどん難しくなり、ついて行くのもやっとの状態だった。

私の気分は最悪だった。よりもよって、どうして担任兼所属部活動の顧問の担当教科が英語なのだろう。得意な数学とかならまだ良かったのに。

私がつなだれているとき、部室の扉が大きな音をたてて開いた。

「すみ　ま　せん。今日　日　直で」

ゼエゼエと荒い呼吸をしながら山辺先輩が部室に入ってきた。相当走って来たのだろう。額にはびっしょりと大量の汗が噴き出していた。

「だ、大丈夫ですか？」

私は思わず下敷きを持って右手の動きを止めて、山辺先輩に声を掛けた。

「……はい　大丈夫　です」

山辺先輩はだいぶ呼吸が落ち着いて来た様子で私に返事をする、空いている椅子に座った。

山辺先輩が席についたのを確認すると、青田先生が口を開いた。

「よし、それじゃあ。文化祭について話し合おう。例年通り、何か出し物を考えなきゃならん。何か案はあるか？」

青田先生の問いに、私は質問で返事をした。

「あ、あのー。去年とかは何をやっていたんですか？」

私がそう聞くと、部室は重い空気に包まれた。何か言っただけじゃないことを言ってしまったような気分になって、私は質問をしたこ

とを後悔した。

数秒間、無言の時間が流れたが、青田先生が沈黙を破ってくれた。「放送部では毎年、文芸部の作品を朗読することになっている。しかし、今年は文芸部の方に断わられちゃったんだ」

どうして？

とは聞けなかった。いつかの葵の言葉が思い出される。

去年起きたという放送部員の坂本みずき家出事件。

放送部が学校の中で孤立しているというのは言い過ぎかも知れないが、少なくとも「あまり関わり合いになりたくない部活」とは思われているのは確かであろうだ。

再び静かになった部室で、声を発したのは山辺先輩だった。

「僕、書いても良いですよ」

私は山辺先輩の台詞に驚きを隠せなかった。先輩は三年生で色々忙しいはずだ。簡単に言つと、受験生にそんなことをしている暇があるのかどうか疑問だった。

「おー、じゃあ頼むわ。夏休みに合宿は今年もあるから。よろしく」

青田先生は面倒なことが決まって良かったと安心したようで、安堵の表情を浮かべている。

「ちよつと待つてください。合宿って何をするんですか？」

私は困惑した。運動部や吹奏楽部のように、大会やコンクールがあるなら理解できるが、こんな弱小の放送部が合宿を行うなんておかしいと。

「何って、文化祭の準備とかだろ普通。昔からやっているんだ。あーでも去年は俺の免許の更新があったんで、中止したよ。でも、今年には茶道部が部屋貸してくれるって言うて来たからさー。使わないと悪いなーと思って。それに山辺だって、そのときに文化祭の台本書けば良いだろ。久我山も英語頑張れるし。これでみんなが幸せになれるじゃないか」

青田先生は得意顔でそう言った。

私は愕然とした。少なくとも私は幸せになれないことだけは確信

できる。

それに、クーラーの効いていない学校に泊まるなんて真つ平ごめんだ。でも先輩が参加するというなら考える価値があるかもしれない。私だって暇ではない。しかし予備校の夏期講習と日程がかぶっていたら困る。

「私は行きません。予備校あるので」

「そうか、まあ日程決まったら連絡するよ。とにかく山辺は台本よろしくー」

青田先生は立ち上がると、部室から出て行ってしまった。部室のドアが閉まる音が大きく響いた。

気が付くと 部室には私と山辺先輩二人きりしかない。もしかするとこれは告白のチャンスなのではないか？

そう考えた私は右手に持った下敷きの動きを止め、大きく息を吸った。

「あの、先輩」

「はい、なんですか？」

山辺先輩は鞆から教科書を取り出しながら返事をした。

好きです。

たった一言言うだけで良かった。しかし、その一言を頭の中で繰り返すだけで心臓の鼓動は速まり、呼吸すら困難になった。背中をヒヤリと冷たい汗が流れた。それは、暑さのせいではないということだけは確信できる。

「合宿つて、大丈夫なんですか？ 塾とか、予備校とか。何か予定はないんですか？」

結局、口を突いて出てきたのはこんな言葉だった。

まあ、まだチャンスはあるだろう。もう少し親しくなってからの方が成功する可能性だって高いはずだ。

「大丈夫ですよ。この前の中間試験の結果も悪くありませんし」

山辺先輩はシャープペンシルを手に持ち、教科書の問題を解き始めた。

「そうですね。そういえば、廊下に名前が貼り出されているのを見ました」

中間試験や学期末試験の成績上位者は名前が貼り出される。私はわざわざ三年生の廊下にまで行って確認したのだ。

山辺先輩は、私の台詞には返事をしなかった。

それよりも、放課後の放送を担当していない私がいつまでも部室に残っていることを不振に思ったようで、遠慮がちに言葉を発した。「久我山さんは帰らないのですか？」

山辺先輩の言葉を聞いて、私は心にかんりのダメージを受けた。

先輩は、私と同じ空間にいたくないのだろうか？

「そ、そうですね。そろそろ帰ります」

私は立ち上がりながらそう返事をした。鞆を手に持ち、出入口に向かつて狭い部室を横断する。

部室の扉に手を置いて部屋をでる直前、私は山辺先輩の方を振り向いた。

「あの、そういえばさっき青田先生が『鍵が職員室にない』って言うってましたけど……」

私はもし山辺先輩が常習的に鍵を職員室に戻していないようだったら、私の持っている鍵を職員室に置こうかと考えていた。

「ああ、昨日は鍵を戻すのを忘れていました。次からは気を付けます」

山辺先輩は教科書から顔を離さずに答えた。鍵の管理は大事だと思うのだが、先輩はそういったことには無頓着な人間なのかも知れない。

「あの、もし……」

面倒なら私が鍵を職員室に預けます。

その言葉を続けるつもりだった。しかし、途中から山辺先輩の強い口調で私の台詞は途切れてしまった。

「昨日はたまたま忘れただけです。久我山さんは自分で鍵を持っていてください」

私は山辺先輩の大きな声に驚いた。怒っているような強い口調だった。

山辺先輩は、私がびっくりしているのに気が付いたのか、いつもの口調で話し掛けた。

「すみません。大きな声を出してしまつて。ただ以前、青田先生が鍵をなくしてしまつたことがあつたので、つい」

なるほど、そういうことだったのか。青田先生の性格なら鍵の管理も乱雑であることは容易に想像できる。

鍵を職員室にある指定の掲示板に戻さずに、どこかに置き忘れてしまうことも少なくはないのではないだろうか？

山辺先輩は再び教科書に目を向け、問題を解き始めた。左手にシヤープペンシルを握っている。左利きなんて珍しい……。

私は帰ろうと扉に向き直ろうと思つたが、山辺先輩に話掛けた。

「あのう」

「まだ何か？」

先ほど声を荒げてしまつた罪悪感からか、山辺先輩は普段よりも優しい声で返事をしてくれた。

「私、中間試験で英語が酷かつたんです。もし迷惑じゃなければ、その……勉強を教えて頂けませんか？」

私は勢いに任せて用件を述べた。掌にじつとりと汗をかいているのが分かつた。

山辺先輩は私ではなく、開け放たれた部室の窓に視線を向けた。

先ほどまで明るかつた空は綺麗な夕焼けで染まり、小さな入道雲が浮かんでいる。

「……すみません。僕も英語は苦手です。とても教えられるレベルではありません」

先輩は窓からの景色から目を逸らさずに答えた。

なんだか悔しかった。勇気を出した私が馬鹿みたいではないか。

私は今度こそ本当に部室のドアノブを捻り、陽の当たっていない廊下に出た。後ろ手に部室のドアを閉める。

帰ろう。

そう思い、私は鞆を握りなおしながら小さくため息をついた。

「ほー、英語が苦手なのか」

私は驚いて声のした方を見た。

聞かれていたのだろうか？ だとしたら、とても恥ずかしいではないか。

「どちらさまですか？」

知らない人が廊下に立っていた。

猫背気味だが背は高く感じる。詰襟の制服がくたびれて見えた。

どこかで会ったような気がしないでもない。

「私の名前は佐藤卓。三年だ。孝之と同じクラスなのだよ」

「孝之」とは山辺先輩のことだ。なるほど、山辺先輩に用事があるって来たわけか。

私が入ったから気をきかせて部屋には入らなかったのだろう。

佐藤という苗字に聞き覚えがあった。よくある苗字だが、この人物とはどこかで会ったことがある。

「もしかして、生徒会長さんですか？ 私、もう帰るので山辺先輩に用事があるならどうぞ」

そうだ、春に会った素っ気ない会長さんだ。山辺先輩と同じクラスだったのか。

放課後の放送を担当している山辺先輩は、最終下校時刻に放送をしなければならぬ。きっと毎日あの狭い部室で勉強をしているのだろう。

「いや、今日は君に話があったね」

会長さんは思いがけない一言を口にした。

どうして私と話をしたいのだろう？ 正直な話、この人はどこか奇妙な雰囲気纏っていて近寄りたくない。あまり一緒にいたくない人物だ。

私はあからさまに嫌そうな顔をしたが、会長さんはおかまいなしに話を続ける。

「そうだな。生徒会室が空いているからそこで話そうか？ 英語なら私が教えても構わないし……」

会長さんは返事も聞かずに私の腕を掴んだ。

「ちょ、ちょっと待ってください。私、今日はもう帰ります」

私はそう言いながら会長さんの手を振り払った。少しでも会長さんを睨み付けると、踵を返して下駄箱へ向かう。

「孝之についての話なんだ」

後ろから会長さんの声が聞こえた。

山辺先輩の話とは、会長さんは何を話すつもりなのだろうか？

私は会長さんの言葉を聞いた直後、すぐさま振り返った。すぐに会長さんとの距離を詰める。

「分かりました。生徒会室に行きましょう」

私がそう返事をすると、会長さんは一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに満足気な表情を浮かべた。

「そうか、では行こう」

私達は早足で放課後の廊下を進んだ。まだ生徒は残っている時間なのに、この廊下には人っ子一人いない。

廊下を進む二人分の足音だけが、私の耳に響いた。

二章 夏(2)

生徒会室は、放送部とは比べ物にならないくらい広がった。以前は一瞬だけしか見ることができなかったが、細長い机は部屋の大半を陣取っていた。部屋の隅にはたくさんのダンボール箱があり、『済』『未処理』との二つの言葉のどちらかが書かれていた。

「いや、片付いていなくて悪いね。適当に座ってくれ」

私は細長い机を囲むようにしてずらりと並んでいるパイプイスの一つに腰をおろした。

それにしても広い部屋だ。今は私と会長さんしかいないからかなり広大に思うが、きっと他の生徒会役員が集合したら狭く感じるのだろう。

会長さんも、私の座っている場所よりも椅子一脚分の距離をおいて座った。

しばらく無言の時間が過ぎる。先に口を開いたのは会長さんだった。

「英語が分からないんだっとな。どこが分からないんだ？ 私が見よう」

何ということだろう、あまり……というか全くと言って良いほど親しくない会長さんに勉強なんて教わりたくない。そもそも私は、会長さんが山辺先輩の話をしたいというからここまで来たのだ。

「結構です。自力で頑張ってみます」

私はできるだけ冷たい声で、素っ気なく返事をした。

私が会長さんに気があるなんて思われたら堪ったものではない！

「ほう、孝之なら良いのか」

「盗み聞きは良くないですよ」

面白そうに話す会長さんに、私は些か腹をたてた。この人は私を馬鹿して楽しいのだろうか？

「盗み聞きするつもりはなかったんだがね。たまたま聞こえてしま

つたんだよ。しかしまあ、時間も時間だしそろそろ本題に入るとしようか」

会長さんは楽しそうに笑いながらそう言った。

私の腕時計は午後六時を指していた。さっきまで見えていた夕焼けは、生徒会室の大きな窓からは見えなかった。

会長さんは、私をからかった笑顔を、真面目な顔に戻してから真っ直ぐな目で私を見た。

「私はクラシックが好きなのだよ」

どきりとした。私は思わず会長さんの真っ直ぐな視線から逃れた。初めて放送をした月曜日の朝、山辺先輩に、放送でクラシックを流さないように頼まれたのを思い出す。私は横を向きながら言葉を返した。

「だから何ですか？」

視界の端で、会長さんが探るような目付きで私を見ているのが分かる。

「メディアは常に公平であるべきだと思うのだが……孝之に何か言われたのか？」

どうしよう。

まさかこんな展開になるなんて予想もしていなかった。本当のことを言ってしまうても良いものだろうか？

真実を伝えるのは簡単だ。会長さんの言葉を肯定すれば良い。しかし、本当にそんなことをしてしまっても良いのだろうか？

私は悩んだ。悩んで悩んで、頭が真っ白になってしまったのだ。「クラシックは眠くなるので嫌いなんです。山辺先輩は関係ありません」

私は嘘をついた。山辺先輩はこのことを、隠しておきたいと思っていたのだと思う。

なぜかは分からない。とにかく私は会長さんに嘘を伝えた。

「……そうか。なら良いんだ。すまないな、時間をとらせてしまつて」

会長さんは納得していない表情だったが、それ以上言及はしなかった。

私は立ち上がり、部屋の出入口へと歩いた。数歩進んだところで、会長さんが再び私に尋ねた。

「最後に一つだけ訊かせてくれ。孝之は、君にも敬語を使うのか？」
私は驚いて足を止めた。後輩に敬語を使う人は少ないが、決して珍しい存在ではない。

私が驚いたのは、同じクラスである会長さんがその質問をしたことだった。親しい間柄であるならそんなこと、それこそ本人に訊いたら済む話だ。

「会長さんは、山辺先輩とお友達ではないのですか？」
そういえば、会長さんは山辺先輩と同じクラスとは名乗ったが、友達とは言わなかった気がする。

「私は佐藤だ。孝之とは二年の頃から同じクラスの友人だ。そもそも質問をしているのは私の方なのだが」

会長さんは、少し苛立ちを見せながら答えた。

私は会長さんの返事を聞いてますます訝しんだ。一年以上付き合いのある友人の口調についてなぜ私に訊くのだろうか？

「私にも敬語ですよ。会長さんにもそうなんですか？」

私が尋ねると会長さんは「ああ」と短く肯定の返答をした。名前を呼ばせるのは諦めた様子だった。

長い廊下を進みながら、私は会長さんの言葉を思い出していた。

私はそんなに親しくない後輩に敬語を話すよりも、一年以上の付き合いがある友人に敬語を話す方が異常だと思う。どちらにしる、口調なんて癖みたいなものだ。ある日突然変えられるようなものでもない。どうして会長さんはそんな事を気にするのだろうか？

そんなことを考えながら私は下駄箱に辿り着いた。

ちょうどそのとき、放課後の放送がかかった。最終下校時刻を伝えるものだ。山辺先輩の単調な声が、妙な機械音を介して聞こえる。同じ人物の声とは思えないものだった。私の声もこんな風に変わ

って聞こえるのだろうか？

私は鞆を持ち直すと靴を履き替え、校庭と繋がる大きな扉を開いた。

夏の生暖かい風がスカート揺らす。太陽が落ちたので、昼間のような照りつける暑さはない。

一歩外へ出たときだった。冷たい滴が頭を濡らす。

雨が降っていた。まだ小雨なので雨音は聞こえない。

そのままでも帰ることは可能だが、私は校舎の中へと戻った。

雨に濡れるのは好きではない。特に夏はいやだった。汗を吸い込んだ制服が、雨で肌にぴったりと密着する。なんともいえない不快感に襲われるのだ。とてもではないが耐えられない。

梅雨の時期には置き傘をしていたが、今はそれもない。

確か、『忘れ物置場』に行けば傘くらいはあるだろう。

そう考え、私は歩いてきた廊下を引き返した。

『忘れ物置場』という空き教室は鍵が掛かっていた。きつと盗まれても構わないものしか置いていないからだろう。

私は教室内を見渡した。電気をつけても薄暗い。それだけでなく、かなり埃っぽい。

最近はずいぶん子供の人数がないので、使われていない教室が多いらしい。

しかし、やはり管理が大変なのだろう。そうでなければ放送部に新しい部室が貰えない理由がない。

私は教室内のめばしいビニール傘に目を止め、近付いた。これを拝借することにしよう。

『忘れ物置場』を出ると、廊下を歩いている人物が見えた。下駄箱の方へ向かっている。これから帰るのだろうか？

私は傘を握りしめながら、早歩きでその人物との距離を詰めた。段々と鮮明に見えてくる後ろ姿は、詰襟の制服を着ていることがわかった。

もしかしたら会長さんかもしれない。

だとしたらとても厄介なことになる。「ああ、君か。まだ帰って
いなかったんだね。中一から英語で躓くと……云々あーそれぞれ」
という具合に皮肉を言って来るに決まっている。

実際、この間の中間試験では山辺先輩よりも上位にいたような気
がしないでもない。名前は確か……佐藤……佐藤……すナントカ
だった。下の名前は覚えていない。クラスに数人はいる苗字だから、
もしかしたら違う人かも知れない。だが、態度や生徒会長という役
職から想定して頭は悪くないのだろう。少なくとも赤点ギリギリと
いうことはないはずだ。

だからといってあの、人を見下すような態度は気にくわない。

結局私は、目の前を歩く男子生徒には声を掛けなかった。

学校に一ヶ所しかない下駄箱は全校生徒が利用する。そのため、
とても広いのだ。

私が靴を入れ替えている間、先ほど前を歩いていた男子生徒が下
駄箱の扉を開け閉めする音が聞こえた。鈍い金属音だ。

私はその音を気にせず、時計を見た。午後七時。相当遅い時間だ。
早く帰らないと。

私は革靴を履くと、校庭へ出るために大きな扉を開いた。

先ほどとは違い、雨音がはつきりと聞こえた。うるさいほどの雨
音に私は顔をしかめ、手に持ったビニール傘を開いた。

「あれ？ 久我山さん？」

突然後ろから私を呼ぶ声がした。

「あ、先輩。お疲れ様です」

私は当たり障りのない返答をした。

振り返ると山辺先輩がいた。さっき私の前を歩いていた人物は先
輩だったのか。

さすが先輩だ。ちゃんと傘を持っている。置き傘なのだろうか？
先輩は少し怪訝そうな顔をしていた。もうとっくに帰ったはずの
私がまだ学校に残っていたことを不振に思ったのかも知れない。

「久我山さんはもう帰ったのだと思っていました」

そう言いながら、先輩は持っていた傘を広げた。私もそれにならい、ビニール傘を差すと、ザーザーと降る雨の道を進み、先輩の隣を歩く。

ごく自然に、先輩と下校することができた現実には私は舞い上がっていた。

雨音が一気に大きくなったので、私は少しだけ声のボリュームを上げて答えた。

「さっきまで会長さんと話をしていたんです」

私の言葉に、山辺先輩は目を見開いた。驚いたような表情だ。

「卓君と知り合いなんですか？」

私は始め、『卓君』が誰なのか分からなかった。数秒空いてから、それが会長さんの下の名前だということに気が付いた。

「知り合いというか何というか分かりませんが。話がしたいと言われたので」

強い雨だとなかなか足が進まない。会話をしながらだとなおさらだ。私達はやっと、校門の桜の木まで辿り着いた。

「どんな話をしたのですか？」

山辺先輩は少し緊張した声を出した。

私は驚いて先輩の方を見たが、黒い傘で隠れた表情を伺うことはできなかった。

「たいした話じゃありませんよ。会長さんの『クラシック好きだー愛してるー』という話を聞かされただけです」

私は少しふざけた調子で答えた。何も気にしていないふりをする。本当は、初めて放送をしたあの日、クラシックを禁止した理由を聞いただけだった。

しかし、山辺先輩にはそれをさせない雰囲気を感じていた。傘がずれて半分見えた横顔が張り詰めていた。

「そうですね。それでは僕はこっちなので」

もう随分歩いたのだろう。駅の近くの大通りまで来ていた。

車が速いスピードで走り抜けてゆく。銀杏の木がずらりと並んだ

歩道は、排気ガスの匂いが強い。

山辺先輩は私に向かって右手を上げると、駅の方へ歩いて行った。次の瞬間。大きな鈍い音が聞こえた。

「痛っ！」

続いて先輩の小さな声。

「どうやら、お店の看板にぶつかったようだった。」

「だ、大丈夫ですか？」

私はすぐに先輩に駆け寄った。「冷やし中華始めました」と書かれた看板が倒れているのが見える。

「久我山さん」

先輩はうずくまり、額を抑えていた。七三分けの短い髪を強い雨が濡らす。黒縁の眼鏡にはヒビが入っていた。それにも関わらず先輩は、自身のかすり傷を負った右手を見つめていた。

随分悲惨な状態なのに、先輩はその体制のまま私に小さな声で話し掛ける。

「卓君と何を話したかは聞きません。でも、これからもクラッシュは流さないください。お願いします」

まるで土下座でもしかねない勢いだった。

こんな先輩を見るのは初めてだ。私はひどく狼狽し、ほとんど何も考えないまま言葉を返した。

「わ、分かりました」

山辺先輩は、私の一言を聞くとゆっくりと立ち上がり、倒れた看板を直した。

「では」

短く別れの言葉を口にすると、何事もなかったかの足取りで歩いて行った。

私はしばらくの間、先輩の後ろ姿を見ていた。しかし、いつまでもそうしているわけにもいかない。

雨音が強まる中、私は家路を急いだ。

七月が終わりに近付くと、学校中が浮き足だった空気で満たされる。

それは私も例外ではなく、夏休みをととても楽しみにしていた。そんな雰囲気のおかげかどうかは分からないが、普段と違うことをしてみたくなった。

例えば、いつもはJ POPか落語を流す朝の放送でパンクロックをかけてみたり、仮病を使って保健室へ行ってみたり。例えば、パソコン室のパソコンを私的な理由で使ったりといった具合に。

今日の私は朝からおかしな行動をとっていたと思う。ほとんどの時間、教室にすらいなかった。だから葵の教室へ向かっていた頃には、もう上機嫌だった。

授業をサボるのは素晴らしいほど楽しい。癖になってしまっただ。

昼休みの廊下は窓からの光でキラキラと輝いていた。放送は相変わらずロックンロールだ。

私は葵の教室に辿り着くと、彼女を廊下に呼び出した。

「なに？ 弁当一緒に食べたい？」

葵は昼休みに私がやって来たことに驚いているようだった。

それもそのはずだ。私から葵に接触することはとても少ない。やはりお互いにクラスの友人達の方を優先するのだ。

「うん。駄目？」

社交的な葵はクラスに友人が多い。私なんか比ではないだろう。断られるかもしれない。

「いや、たまには良いかも。ちょっと待ってて」

葵は意外なことにあっさり了承の返事をした。教室へ戻り、クラスの友人と思われる人物と短い会話をしている。二人とも楽しそうに話しているが、会話までは聞こえない。やがて葵の話していた相手は微笑みながら手をふった。

葵は自分の弁当箱を手にとると、私のもとへと歩いて来た。

「じゃ、行こうか」

私はそう言うと、明るく騒がしい廊下を進んだ。歩きながら、昼間の学校は生きている。そう思った。

昨日の、暗く人のいない廊下を思い出すとなおさらそう実感する。

「ねえ、どこで食べるの？」

葵はそう言いながらペットボトルからお茶を飲んだ。夏なのに、相変わらずルーズソックスを履いている。

「多分空き教室があったと思うから、そこで」

私はそう答えると、使われていない教室を見つけた。ドアを横にスライドさせて、中に入る。

教室の中は、掃除が行き届いているためか、『忘れ物置場』とは比べ物にならないくらい綺麗だった。おまけに窓を閉めきっているというのに、ひんやりと涼しい。きつと人が少ないせいだろう。

「へー、こういうところもあるんだ。私も今度空き教室で食べようかな」

葵は感嘆の声を出しながら中央の席に座った。

私も葵の前方の椅子に腰をおろす。

「でもさー、梢から誘ってくるなんて珍しくない？ あ、もしかして山辺先輩と何かあったとか」

私は一瞬どきりとした。いつかの雨の日のでき事を思い出した。

葵は私の感情の変化には気が付かなかったのか、何事もなかったように自分の弁当を開きながら話し始めた。お箸を握りしめ、『頂きます』と拝むポーズをとる。長い髪が前に垂れ、食べ辛そうだ。

「いや、特に何も無いよ。ただ最近葵と会ってなかったから、元氣かなーって思ってた」

そうだ。私は特に葵に用事などなかった。ただ、夏休み前の浮かれた雰囲気酔っているだけなのだ。

私は弁当箱の中の玉子焼きを口に運んだ。焦げ付いていて、あまり美味しくない。

「ふーん。じゃあ何か面白い話してよ」

葵はつまらなそうに弁当箱をつついた。箸の持ち方がどう見ても間違っているが、私は何も言わなかった。

『面白い話』と言われても、そう簡単に思い付くものではない。私は頭をフル稼働させた。

「『面白い話』か。じゃあ、昨日のドラマ見た？」

私は当たり前障りのないドラマの話をつた。

「え、ドラマって王族の話だった？」

葵は食事にも関わらず、肘をつきながら答える。

「うん。あのSFっぽいやつ」

タイトルを『骨粗鬆症』といった。王子が宇宙飛行士になるために、婚約したお姫様を殺害する話だ。

「いや、あれ途中からSFじゃなくてサスペンスになったじゃん。

私三回目から観てないよ」

話はそこで途切れてしまった。私達は黙々と弁当箱の中身を貪る。何も会話のない部屋の空気が恐ろしかった。まるで、この学校には私達しか人間がいなくなってしまったのではないかという錯覚にまで陥りそうだ。

私は必死で話題を搾り出した。

「えーと、文化祭の出し物もう決めた？　うちのクラスは委員長がやる気でき。ミスコンテストに出るって張り切っているよ。まあ、ああいう人がクラスに一人はいると色々と便利だよな。面倒なことやってくれるし」

別に委員長の悪口を言うつもりはなかったが、文化祭の話題を出すとしても鈴木さんの顔が頭を掠めてしまうのだから仕方がない。

私の話を聞いた葵は、「そういえば」と思い出したように語りだした。

「そういえば、なんかメイド喫茶とかいう喫茶店やるみたいよ。私も暇だったら来てよね。でも準備が大変みたいで、夏休みも何日か登校しないといけないらしいんだよね……面倒くさいことこの上な

いよ。私だって忙しいのに」

口では否定的な言葉を話しているが、葵はどこか楽しそうな顔をしていた。私のクラスではよく分からない課題が出ただけだったのに……。

勝負をしているわけではないけれど、なんだか負けたような気がして仕方がなかった。

「放送部では何かやらないの？」

葵は楽しそうな顔のまま、言葉を続けた。ペットボトルのお茶をずるずると音をたててすすする。

「ああ、何か合宿やるみたいよ。文化祭は台本を読むとかいう地味なものだから、文化祭の準備っていう理由じゃないと思うけど……伝統みたいなものなんだってさ」

青田先生に合宿の日程を聞いてみたところ、見事に予備校の夏期講習と時期が被っていた。どうやら、学校に宿泊することはないだろう。

私は返事をしながら、食べ終わった弁当箱をバンダナで綺麗に包むことに躍起になっていた。

葵はのんびりと、から揚げを咀嚼している。弁当箱の中身は、まだ半分以上も残っていた。

「へー、やっぱり部活していると大変なんだね。まあ、頑張りなよ」

葵は、ウィンナーを口に運びながらニヤニヤとしている。普段からは想像できないくらい意味深な笑いだった。

「あー、うん。そうだね、夏期講習で英語の偏差値ガンガン上がるように頑張りますよ」

私がそう返事をするとう葵は意味深な笑みを引っ込め、目を細めた。「え、梢って英語苦手だったんだー。知らなかったよ」

やっぱり葵は私のことを馬鹿にしているのではないか？ 私はそう思わずにはいられなかった。

二章 夏(3)

夏の合宿は七月下旬に行われた。毎年行われているというわりには、一泊二日というとても短い合宿だ。

蝉がうるさく鳴き、カラツとした暑さが続く季節だ。クーラーの効いていない部屋にたった十分間いるだけで、額からは汗が噴出し、息を何度吸っても苦しいと感じてしまう。

午前中は夏期講習だった。いつもは真面目に受けている授業も、上の空だった。午後になれば山辺先輩に会えると考えただけで、浮ついた気分になった。遊園地のアトラクションに並んでいるときの気分に近いのかもしれない。

家に帰った私は半袖のセーラー服に袖を通しながら、顔を綻ばせた。

たった数週間通っていなかったただけなのに、学校へと向かう道はとても懐かしく感じた。蝉の音が暑さを助長させる。

青田先生の話によれば、合宿は茶道部で行われているらしい。クーラーが付いているらしいので、学校に着いたらこの暑さとも別れることができるだろう。

茶道部は三階にあった。大きく口を開けて呼吸をしながら、階段を上がる。

あつた。

私は『茶道部』と書かれた扉を開けた。目の前には襖があつた。どうやら渡しが今立っている小さなスペースは、靴を脱ぐ場所なのだろう。襖で隔てられているのに、クーラーのひんやりとした空気が伝わってきた。

私は呼吸を整えるとハンカチで汗を拭き、ゆっくりと襖を開けた。クーラーの冷たい空気が私を包む。

そこは、六畳の小さな部屋だった。部屋の中央には細長い旅館にあるような机が置かれている。隅にある熊の置物が部屋全体を睨み

付けているみたいに見えた。

「あれ？ 青田先生はいないんですか？」

部屋には山辺先輩しかいなかった。制服である開襟シャツを着ている。中央の机に大学ノートを置き、何か文章を書いているようだった。きつと青田先生に頼まれた文化祭の台本だろう。

「ええ、英語の補習があるみたいで。あと、二年生が育てている稲に水をやるんだそうです」

先輩はノートから顔を離さずに答えた。相変わらず左手でシャーペンシルを握っている。

「そうですか」

私はそれだけ答えた。ここで予備校の宿題でも終わらせてしまおうか。そう思い、鞆から勉強道具を取り出した。先輩の斜向いの座布団に座る。

シャーペンシルの文字を書く音だけが、部屋に響く。家でやるよりも宿題はずっとはかどった。

まるで予備校の自習室のようだった。時計の針が一周する頃には、私はほとんどの課題を終わらせていた。

「久我山さんは右利きなんですね」

長い沈黙を破ったのは山辺先輩の方だった。私の手元をじっと見ている。

そのどこか恍惚とした表情は、いつかの雨の日を思い出させた。

「ええ、山辺先輩は左利きですよ。結構珍しいと思います」

私がそう言うと、先輩は私の手元から目を逸らした。持っていたシャーペンシルを机に置き、眼鏡を外す。

「利き手の話はどうでも良いですよ。すみません」

先輩はため息をつきながら謝った。

謝るようなことじゃないですよ。

そう言おうと口を開こうとしたが、先輩はすぐに言葉を続けた。

「こんな小さな部活動が合宿をするなんておかしいですよ」

「いえ、そんなことは……」

私はあわてて返事をした。伝統的なイベントということなのだから、儀礼的に行うのはおかしなことではないと思う。

山辺先輩は再び大きなため息をつくとき、眼鏡をかけなおした。「合宿の話もどうでも良い話でしたね……」

なんだか疲れたように見える。いったいどうしたというのだろうか？ 文化祭の台本製作が難航しているのだろうか？

「先輩が書いているのって、文化祭用の台本ですよ。どんな内容なんですか？」

私は極力明るい声を出した。それでも部屋のどんよりとした雰囲気は変わらない。私はクーラーの設定温度を一度下げた。

「え、これですか？ あ、えーと。まだ全然ですから。完成したら読んでください」

先輩はそう言うと、ノートを閉じてしまった。かなり動揺していたが、そんなにおかしな内容なのだろうか？ どちらにしる未完成の時点で、人に見られたくないという気持ちは分からないでもない。私は時計を見た。もう午後二時だ。何か食べてくれば良かったかもしれない。

そう思ったとき、青田先生が部屋に入ってきた。丁度良いタイミングだ。私だけでは、この重たい空気を変えることは不可能だ。

「おう、久我山来てたのか。差し入れ持ってきたぞ」

先生は明るい口調でそう言うと、大きなビニール袋を机に置いた。中にはいくつかのインスタント麺と水の入った二リットルのペットボトル、飲み物が入っている。

「俺は、カレー味な」

先生は、そう言いながら部屋の隅にある木彫りの熊の後ろにあった湯沸かし器を引っ張り出した。

私は、ビニール袋の中を覗き込んだ。カレー味とシーフード味、とんこつ味にうどんなどたくさんの種類のインスタント麺が入っていた。

「先輩は何にします？」

私はとりあえず、山辺先輩に聞いてみることにした。さすがに後輩の私が先に選ぶのは良くないと思ったからだ。

青田先生は、湯沸かし器にペットボトルから水を入れている。お湯が沸くまではまだ時間が掛かりそうだ。

「……じゃあ僕はきつねうどんで」

先輩はそう言いながら、『きつねうどん』と書かれた商品を手にとった。ふたを開け、容器の側面に書かれた説明文を読んで、火薬を入れるタイミングを確認している。

「私はシーフード味にします」

私がそう言いながら、商品をビニール袋から取り出したときだった。

「そつだ、久我山。文化祭に向けて放送の練習をしよう」

「はあ？ 発声とかですか。こつくりさんの紙の朗読ですか？ あれ無駄な上に疲れますよね。昔音楽の授業でやりました」

そうなのだ、小学生のときの音楽の先生は二回代わって三人の先生に教わったことがある。どの先生も偉そうで、授業のたびに気分が悪くなったものだ。五十音を一人ずつ順番に言わされたときには殺意に近いものを覚えた。

そのとき、湯沸かし器が機械音を鳴らし、お湯が沸いたことを知らせた。一番湯沸かし器に近い位置にいた山辺先輩が全員の容器にお湯を注ぐ。

「いやいや、放送で大事なものは滑舌の良さだ。なにかのコンクールでも重要……だったと思う。とにかくこれを読んでみる」

そう言いながら先生は私に一冊の文庫本を手渡した。

「えーと『妹萌えとはなんたるか！』ですか」

私が表紙に書かれたタイトルを読み上げると、先輩が大きく目を見開いてこちらを見た。怒ったような表情に見えなくもない。

「あの、先生。もうラーメンできたと思いますよ」

先輩はあくまでも普段どおりの台詞でそう言った。

正直話題が変わって良かった。どう考えてもおおかしな文章を読ま

されるに決まっている。

私は心の中で先輩に感謝した。

私達はしばらく無言でインスタント麺を口に含んでは、飲み込む作業に勤しんだ。こんな時間までご飯を食べていなかったため、空腹を満たす感覚はとても幸せなものだった。

「この辺りで有名な心霊スポットがあるのは知ってるか？ 結構有名な話だから山辺なら知ってるんじゃないか？」

ラーメンをすすりながら青田先生はおもむろに口を開いた。

先生はそう言いながら山辺先輩の方をチラリと見た。そのあと、またラーメンをすすする。

カレー味のラーメンは机に茶色のしみをつくる。後生だからずると食べ物をすすするのは止めて欲しい。

「い、いえ僕は知りませんよ」

先輩はきつねうどんを見つめたまま答えた。さっきまで動いていた箸が止まっている。いったいどうしたのだろうか？ 心霊スポットとか怖い話とか、そういう類の話が苦手なのだろうか？

「あの、どんな話なんですか？」

私はその心霊スポットとやらに興味が湧いたので、そう質問をした。夏なのだし怖い話を聞いてみたい気分でもあったのだ。

「この辺りに、教会があるっていう話なんだけどな。」

なんでも昔は個人の財産だったんだが、相続税か何かの関係で国のものになったらしい。今は、公共の場所となっているんだが、市役所の地図には載っていないんだ。

色々噂があつて、戦争の捕虜になった外人の子供の幽霊がたくさん出てくるとか、村八分になった食人の家族が共食いをしたとか昔面白半分で肝試しにいった連中が全員事故死したとかいろいろ噂があるんだよ。

まあ、所詮いわくつきの場所ってことだな。

本当に色々な話があつて、知っている奴らでも人によって全く話が違つらしい。話に尾ひれが付きすぎて、收拾がつかなくなつたん

だろうな」

そこまで話すと青田先生はお茶をすすり、一息ついた。

静かな部屋にはラーメンをすする音だけが聞こえる。山辺先輩は音をたてずに食べている。さすが先輩だ。

「……今からその教会に行ってみないか？」

青田先生の声に私は茶道部にあつた置時計に目をやった。午後
三時だ。まだまだ暑い時間だ。

私は青田先生の提案はとても魅力的だと思った。私は聞いたことのない話に興奮していた。もしかしたら葵は知っているかもしれない。
い。

「いいですね。行きましょう」

私がそう言うと、隣に座っていた山辺先輩が驚いた顔をして私の方を見た。私が先生の提案に賛成したのが、意外だったのだろうか。

「お、久我山。今日はノリが良いな」

青田先生は嬉しそうな表情を浮かべながら、山辺先輩の方を向いて言葉を発した。

「山辺はどうだ？ もちろん行くだろ」

山辺先輩は返事をしなかった。無言の時間が数秒間流れる。

私は不思議に思い、先輩のいる左側へ顔を向けた。

山辺先輩は真つ青な顔をしていた。そんなに今の話が怖かったのだろうか？ それほど怖くはなかったと思うのだが……。もしかしたら具合が悪いのかもしれない。

「先輩？ 大丈夫ですか？ どこか具合でも悪いんですか？」

私は心配して先輩に声を掛けた。夏風邪でもこじらせたのだろうか？ しかし、さっきまでは健康そのものに見えたのに……。いったいどうしたというのだろうか？

私と青田先生は何も言葉を発しない山辺先輩に驚き、顔を見合わせた。そのとき、おもむろに先輩が口を開いた。

「絶対に……そこには行ってはいけません！」

普段の穏やかな口調からは想像もできないくらい切羽詰まったよ

うな口調だった。

私は、いつもと違った何か異常な雰囲気について行けなかった。

「どうしたんだ山辺。そんなにビビることないって。ちよつとした肝試しだよ」

「そ、そうですよ。まだ時間も早いし、ちよつとだけ見に行くだけじゃないですか？」

六畳の茶道部の部屋には奇妙な空気が流れていた。それもこれも山辺先輩のおかしな行動のせいだ。

私と、青田先生はその空気に飲まれないように必死だった。

「いえ、いやです。僕は行きません」

先輩はきつぱりと述べると、油揚げを口に含んだ。

三章 秋（1）

「告白しちやえば良いじゃん」

文化祭が近付いた放課後の屋上。昼休みはいつも三年生ばかりだが、この時期の放課後になると、屋上もめつきりと寂しくなる。

葵はコンビニで買ったパツクの牛乳をすすりながら、まるで息が苦しいなら呼吸したら良い。と同じようにそんなことを言った。

「で、でも。同じ部活だし」

そうなのだ、断られたらこれからずっと気まずいではないか？

現に以前ラブレターを書こうとしたときも、一行も書くことができなかった。

秋の冷たい風がスカート揺らした。葵の短いスカートに目をやると、細い足に鳥肌がたっているのが見えた。

「三年生ならもう引退じゃん。第二ボタン下さい！ とか言っとかないと先越されるよ。あつ、でも山辺先輩なら大丈夫か」

確かに三年生は文化祭前に引退する人が多い。山辺先輩も、台本が仕上がったら引退するのだろうか？

山辺先輩が引退したら、放送部はいよいよ廃部になるかもしれない。

葵は牛乳を飲み終えると、ストローを奥歯に挟んだ。良く分からない行動だ。

「ちよつと葵、山辺先輩なら大丈夫ってどういう意味？」

私が訊ねると、葵は潰れたストローを口から出して答えた。

「いやいや、別に深い意味はないよ。とにかく、私は格好良い人がタイプだし、応援してるから」

そんな言い方をしたら、まるで山辺先輩が格好良くない人みたいではないか。私は少しムツとしたが、あまり深く考えないことにした。

葵は牛乳パツクを潰すと、「じゃあ私、文化祭の準備あるから」

という言葉と共に、私の視界からいなくなつた。

私のクラスは、担任の青田先生はもちろん、クラス委員長の鈴木さんすらやる気がないので、文化祭の出し物は「何かしらのレポートを書いてくる」という夏休みの宿題をそのまま掲示することになつてた。クラスメイトも皆文化祭という行事に関心がないのか、反対意見は一つも出なかつた。鈴木さんに到つては、ミスコンテストに力を注ぎたいという意図がバレバレだった。

他のクラスは、演劇やお化け屋敷や出店など、夏休み中も忙しく準備をしていたらしい。

葵のクラスは確か、冥土喫茶とやらを行う予定らしいが、宇宙人のコスチュームプレイでもするのだろうか？

「寒！」

まだ九月だというのに、頬を撫でる風は冷たい。早く冬服になれば良いのに。そんなことを考えながら、私は放送室へ向かつた。

放課後の部室には先輩がいる。下校時刻の放送をするためだ。最近、文化祭の台本が仕上がつたかどうか毎日先輩に訊きに行くのが私の日課となつていた。

掃除をしたばかりだと思われる廊下は、窓から射し込んでいる夕日に照らされて、光沢を放つていた。

私は歩きながら、先ほどの葵の言葉を思い出した。

告白しちゃえば良いじゃん。

頭の中をぐるぐるとその言葉が回る。

どうしよう、山辺先輩が放送部を引退したら、告白する機会なんてやってこないだろう。だとしたら、今日のように先輩に会えるうちに告白した方が良いのかもしれない。

そう考えると、心臓が今までよりも速く動き出す。それとは裏腹に、部室へ向かう足取りは重い。

「着いちゃった」

私は小さくため息をついた。心臓が口から出てしまいそうなくらい速い。

ふと、初めての放送をした日を思い出した。
いつまでも廊下に突っ立っているわけにもいけないので、私は仕方なくドアに手を掛けた。

ひんやりとしたドアノブの温度が心地良い。

「お疲れ様です」

私は努めて普段通りの声を出した。

山辺先輩は、机の上に参考書を広げている。

いつも通りの部室、それが私を冷静にしてくれる。早鐘のように動いていた心臓が、少しだけ元に戻ったような気がした。

「ああ、久我山さん。台本ならまだです」

先輩がいつも通りの返事をする。抑揚のない声だ。

いつもの私は、返事を聞いた後さっさと下校するのだが、今日は違った。

葵の言う通り、誰かに先を越される可能性もあるのだ。それに、明日台本が完成したら先輩は部活を引退するかもしれない。今のようなチャンスを逃したら、一生後悔するだろう。

山辺先輩は、いつまでも部室に留まっている私に訝しんだ目を向けた。

「あのー、先輩」

私は極力明るい声を発した。

少しの間収まっていた心臓が、また速くなる。それに伴うように顔が赤くなる。私は秋の冷たい空気に感謝した。

「何ですか？」

先輩は眼鏡を押し上げながら言葉を返した。人差し指ではなく、中指を使う。

やっぱり格好良い。

窓から射し込む夕日に照らされて、まるで映画のワンシーンのようだ。

「あの、私……」

さっきまであんなに速いと思っていただ心臓の感覚がない。

それだけではない、ひんやりと冷たい空気を感じていた皮膚も、靴を痛いほど握りしめている掌も、熱く感じた顔も、なにも感じないのだ。

ただ、機械のように唇が動く。何度も頭の中で考えた言葉を、口ポットみたいに話すのだ。

「私、山辺先輩のことが好きです」

そう言った後、感じなくなっていた感覚が一気に戻ってきた。靴を握った掌が痛い、身体がダルい、頭がクラクラする。

先輩の方を見ることができない。先輩はどんな表情をしているのだろう。

「あー、えーと。まあ、久我山さんの気持ちは分かりました」

先輩のその言葉を聞いた後、私はもう、この狭い部室に存在し続けることができなかった。

冷たいドアノブをぐるりと回し、廊下を走る。

走って、走って、近所の公園まで辿り着いたとき、

やっと冷静になることができた。涙が溢れて来ると思ったが、そんなことはなかった。

ただ、苦しかった。

そんなことがあってから、私が放課後の部室に顔を出すことはなかった。

文化祭の日が近づいているにも関わらず、先輩の台本が完成したという報告はない。明日にでも青田先生に訊いてみよう。

「えー、フラれた？」

葵と下校するのは始めてだ。

秋の風はますます冷たくなり、ショートカットである私の首筋は、マフラーをしなければ寒さを防げない。

葵は相変わらず、寒そうな丈のスカートに、暖かそうなルーズソックスという奇妙な組み合わせの服装だ。

「んー、多分」

そうだ、はつきりとフラれた訳ではない。しかし、あの雰囲気はどう考えても嬉しそうではなかった。今思つと、面倒臭そうに返事をしていたような気もする。

「なに多分つて。じゃあさ、梢の失恋記念に合コンセッティングしてあげるよ」

人が失恋したというのに、葵は嬉しそうにそう言った。とても慰めているようには聞こえない。

「合コンつて、合コンパでしょ。私は遠慮しとく」

合コンパというものは、華やかな飲み会というイメージがある。どう考えても、私のような野暮つたい人間が参加するのは不自然だ。「あっそう、まあ気が向いたら言つてよ」

葵はそう答えると、一つの自動販売機の側で足を止めた。鞆を漁り、財布を取り出す。

「いったいどうしたというのだろう？」

「うわー、冬限定の苺牛乳だ。これ美味しいんだよね」

葵は嬉しそうな声を発しながら、小銭を自動販売機に入れる。

「梢も何か買ったら？」

そう言われ、私は自動販売機に目をやった。

一番目立つ位置に、「オススメ」という文字が踊っている。

「じゃあ、私はホットココアにしようかな」

葵にならない、私も財布を出した。

購入したココアの蓋を捻り、冷たくなった唇を押し当てる。少し首を傾けると、甘ったるい液体が食道を通つて行く。

私と葵は、甘い液体を飲み込みながら、公園のベンチに座った。

冬の公園は、人が少ない。日が落ちるのが早いからだろう。

「そういえば、坂本さんがいなくなったのって、文化祭の日だったよね」

葵がおもむろに声を発した。文化祭が近くなり、思い出したのだ

ろうか？

徐々に、坂本さんの名前を聞いた。放送部が孤立する原因となった坂本さんの失踪事件。

いったい何があったというのだろうか？ 放送部の人間だったということは知っているが、青田先生や山辺先輩の口から彼女の話聞いたことはない。

「私色々調べたんだけど、当時は青田先生が疑われてたみたい」

葵はパツクの牛乳を飲み終えると、ストローを奥歯に挟んだ。奇妙な癖だ。

「あんな性格だし、でも坂本さんは死んだわけでもないただの行方不明者だから、家出つてことになってるらしいよ」

私は最後の一口のココアを飲み込んだ。缶の飲み物は飲みにくい、首を目一杯傾けなければならぬからだ。ほどよい甘さのココアが舌の上を通る。甘いものに慣れるのは怖いのもかもしれない。「うまい、もう一杯！」と言ってしまいそうになる。

「へえー、そうなんだ」

私はあまり坂本さんという生徒に興味がなかった。ただの家出少女なんて、今さらドラマでも流行らない。放送部の人たちがその話題を出さないのも、警察の人に疑われていたりして、あまり良い思い出がないからだろう。

「なんか興味なさそうじゃん」

葵は飲み終わったパツクを公園のゴミ箱に投げた。「専牛乳」と可愛らしい文字でプリントされたパツクは、綺麗な曲線を描き、見事ゴミ箱へ吸い込まれて行った。

「まあ、あんまり興味はないかも」

私も葵にならい、空になったココアの缶をゴミ箱に向かって放った。缶はパツクより重さがあるからなのか、ゴミ箱へ行きつく前に地面へ落ちてしまった。

私は仕方なく立ち上がり、缶を拾い上げてゴミ箱へ捨てた。

「でもさ、山辺先輩のことだったら興味あるんじゃない？」

私はゴミ箱に足をぶつけてしまった。僅かな動揺。足元に目をやると、ローファアの爪先が土で汚れていた。

「い、いや、もうそれは終わったことだし……」

駄目だ、口調もつかえてしまう。あれこれと考えれば考えるほど、頭の中が白くなってゆくのが分かった。

「私は暇人だから、ついでに山辺先輩のことも調べたんだ。知りた
い？」

葵は楽しげな微笑みを口に浮かべ、足を組んで見せた。

ゴミ箱の件も含めて、私は目の前にいる佐藤葵という人間に、ひどい劣等感を抱かずにはいられなかった。

「そりゃ、知りたいですよ」

思わず敬語を使ってしまう。山辺先輩と何らかの関連があるなら、坂本さんのことも興味津々だ。

「坂本さんが去年の文化祭の日になくなった。という話はしたよね」

葵はなぜだか組んでいた足を戻して、真剣な顔をしている。

私は小さく相槌を打った。

「それで、当時山辺先輩は放課後の放送を担当してたらしいの。でも文化祭のあとからは友達に任せっきりだったらしいよ」

葵はそこで言葉を切った。唇を湿らせ、大きく息を吸う。

「二年生は油絵の授業があるらしいんだけど、山辺先輩は毎回画材道具を持ち帰ってたんだって。しかも文化祭が終わったその日から毎日」

私は脱力した。今の話だと、坂本さんがいなくなった辺りから山辺先輩が油絵に嵌まっていたということ以外は分からない。

坂本さんの失踪話とはどういう関係があるというのだろうか？

「ふーん、それだけ？」

葵はヤレヤレと頭を横に降った。足を反対に組み直し、首を少し傾げて見せた。自分がどう見られているのかを計算したのではない

かと疑うほど、モデルのような華麗な動きだった。

「それで私、山辺先輩の油絵はどんなもんなのか見てみたわけ。去年の作品がまだ美術室に残ってたからね。美術部の先輩に頼んだら一発だったよ。で、その絵がめちゃくちゃ上手いの。遠近法みたいな…… パース、だっけ？ あれとか凄いし、色も立体的だったし」
葵は雄弁に山辺先輩の描いた絵について語った。葵がここまで他人のことを誉めるのを見るのは初めてかも知れない。

あまりにも語るのので、私もその絵を見てみたくなくなってしまった。パースではなくパースペクティブだったと思うのだが、聞かなかつたことにしよう。

「私もその絵見たいな」

私がそう言うと、葵は勢い良く立ち上がり鞆を握った。

「じゃあ、見に行く？ 確か市役所に飾ってあったと思うよ、なにかの賞を取ったとかで」

私は腕時計に目をやった。もう六時を回っている。辺りももう暗くなっていた。

「えっ、今から？」

私は驚いて先を歩く葵に声を掛けた。

すると葵は短いスカートをひらりとなびかせながら振り返った。長い髪を耳に掛ける。

「大丈夫だって、まだ六時だよ」

そう言いながら私の手を取った。

私と葵は市役所へと続く道を歩いた。

大通りなので、店の灯りで十分に明るい。街灯などいらなくらいだ。

私は、山辺先輩の絵を見るだけだというのに、まるで告白した日のように緊張していた。市役所に飾ってもらうなんてかなり上手いのだろう。

「そついえば、梢、この前の合宿どうだった？」

段々と市役所が見えてくる。まだ閉まっていないようだ。たくさ

んの窓からは煌々と灯りが漏れている。

「ああ、青田先生が怖い話をしてくれたよ。心霊スポットがあるっていう。どこだかは教えてくれなかったんだけどね。有名な話みたいだから葵も知ってるかも。教会の話だよ」

青田先生の話しだと市役所と同じ公共の建物らしいが、場所を聞いていなかった。

しかし、なぜ山辺先輩はあのかき、あの場に行くのをあれほど拒んだのだろうか？

「ふーん、私は知らないなあ。昔流行ってた話なんじゃないの？ まあ今度詳しく教えてよ」

確かに、今流行の話題なら葵が知らないはずがない。きっと今の三年生あたりなら知っている人がいるかも知れない。

葵は答えながら市役所の扉を開けた。暖房が効いているからか、冷たくなつた皮膚を暖かい空気が通り抜けて行った。

階段の近くに、それはあった。

どこか焦燥感のあるその絵は、小さな箱の中に人間の首だけが描かれていた。

黒い髪は流れるように長く、美しい光沢を放っていた。どす黒い色が、タイトル張りの床に鮮やかな血痕を散らしている。

絵のタイトルは、『断罪してください』とある。

「上手いよね、普通ここが歪んじゃうのに、綺麗に描けてる」

葵は興奮したように絵を誉めていた。

確かに上手だが、正直気持ちの悪い絵だ。ひどく現実味のある、まるで本当に見たままを描いたのではないかと錯覚するくらいに。

私は絵のタイトルも気になった。『断罪してください』とはなんと宗教っぽくはないだろうか。

私はその絵を見つめ、しばらくの間放心状態になってしまった。

「魅せられる」とはこのことを言うのだろうか。その絵は確かに人を惹き付ける何かがあった。

写真とは違う、見たままを描いたというような単純なものではな

い。自分のとても好きなものを、恐ろしいほど主観的に描いた作品という言い方がぴったりだ。

好きな人の仕草は、どんなに気持ちの悪いものだとしても華麗なものに見えてしまう。脳内の美化フィルターを通した世界。とても言うのだろうか？ 私は山辺先輩に見えている世界を知りたくなかった。

「あつ、もうこんな時間。帰らないと」

葵の言葉で我に返り腕時計を見ると、七時を指していた。流石にそろそろ帰らないと、まずいかも知れない。

私達は市役所をあとにした。

葵と別れたあと、私は歩きながらあの絵を思い返してみた。

立体感のあるタッチ。なんともいえない焦燥感。『断罪してください』というタイトル。

山辺先輩は、何を思い、あの絵を描いたのだろうか？

三章 秋（2）

秋の天気は変わりやすい。つい先日までマフラーが必要なほど冷たい風が吹いていたというのに、今日は太陽の照りつける暑い日だ。群青色の空を眺め、私は誰もいない屋上でため息を吐いた。

文化祭当日。私のクラスは、提出したレポートを机の上に並べただけの素っ気ない出し物となっている。当然クラスメイト達は部活動に全力を注いでいる。もちろん私も放送室へ行き、午前中は忙しく過ごしていた。

午後は予定通り、山辺先輩の書いた台本を読む予定だったが、どうやら先輩は欠席しているらしい。放送部での出し物は諦めた方が良さだろう。

することのなくなった私は、職員室から屋上の鍵をくすね、こうして空を仰いでいる。

帰っちゃおうかな。

不意にそんな考えが頭に浮かんだ。文化祭特有の浮わついた雰囲気は、なんとなく苦手だ。なぜあんなにも楽しそうにできるのだろう。

私は屋上から校庭を見下ろした。焼きそば、パフェ、チョコバナナ等の出店が並んでいる。ここから見ると、人間がとてもちっけけなものに見えてしまう。

やっぱり帰ろう。

私は校舎に入り、階段を下りて誰もいない職員室に鍵を返した。良かった、誰かに見つかったら大変なことになる。

騒がしい学校をあとにして、私はこれからどこへ行くのか迷った。こんなにも早い時間に帰ったらお母さんに不振に思われること必至だ。とりあえず、あと一時間くらいはどこかで時間を潰しておいた方が良さだろう。

古本屋で立ち読みでもしようか。

私は小学生の頃、足繁く通った古本屋へと向かった。駅前にある本屋のように大学生のお姉さんではなく、背の低い、白髪の混じったお爺さんが一人で店番をしているその古本屋が大好きだった。静かで落ち着くし、何時間立ち読みをしても何も言われないからだ。

古本屋へと続く道は、家とは反対方向だ。山に近い場所なので、緩やかな上り坂が続く。人通りも少なく、木々がうつそうと生い茂っている道を越えると、やっと到着することができる。

私はその薄暗い道が苦手だった。走ってしまえば一瞬なのに、なぜかゆっくり歩いてしまう。そうさせてしまう不思議な雰囲気のある道だった。

私はふと視線を右にずらした。生い茂った木々の間から見えるのは……。

「きよ、教会？」

どうしてこんな場所にこんな建物があるのだろうか？ 私の頭は混乱した。これは夏の合宿で青田先生がした怪談話に出てきた教会ではないか？ 立地からして、他には考えられない。

こんな偶然があるものだろうか？ 小さい街だから、確率的にはそこまで低くはないのかも知れない。

私は古本屋のことなど忘れて、目の前の古びた教会へと足を進めた。足元に落ちていく枯れ葉を踏みつけるたびに、高揚感が増してゆくの分かった。

この辺りには心霊スポットというものが無い。「怖い」と言われているものが好きな私だが、わざわざ電車を乗り継いで出掛けたことはないのだ。本物の心霊スポットへ向かっているという事実は、ひどく私を興奮させた。

「あれ？」

段々と教会の全貌が見えてきたとき、重そうな扉の前に誰かが立っているのが見えた。

私は一瞬、教会に近付くのを躊躇した。「心霊スポット」として

知られている場所に、一人で立っている。これは変質者が何かではないのか？頭のおかしい人かも知れない。

私は立ち止まり、辺りを見渡した。先ほどまで群青色だった空が、綺麗なオレンジ色に染まりつつあった。

そんな普通の景色に少し安心したあと、大きく深呼吸をし、目を凝らして教会のそばに立っている人物を見た。

白い半袖の開襟シャツ、黒のズボン。うちの学校の制服に似ている。そうだとしたら、近付いてもまずいことにはならないはずだ。そもそも私は教会の中に用があるのだ。教会の外に突っ立っているだけの人物なんて、無視して通り過ぎれば良いだけの話だ。

私は意を決して再び歩を進めた。段々と開襟シャツを着た人物が鮮明に見えて来た。

驚くことに、開襟シャツの人物の方から話し掛けて来た。

「あれ？ 久我山さんじゃないですか。すみません、台本、完成しませんでした」

山辺先輩だった。ひどく動揺した声色だ。台本も書かずに文化祭をサボり、こんなところで時間を潰していることを、後ろめたく思っているのだろうか？

そんなことより私は、以前の告白の一件を思い出し、先輩の顔をまともに見ることができなかった。

「別に、構いませんよ。それよりこの教会って、夏に青田先生が話してくれた教会にそっくりですよね」

何か話をしなければ。

そう思い、私は教会について話しを振ることにした。

「立地からすると、そうですね。でも入らない方が良いですよ」

山辺先輩は動揺した声色のまま答えた。

どうして中に入っただけにはいけないのだろうか？ 山辺先輩は合宿のときも、この教会へ行くことを強く反対していた。

「どうしてですか？ 大丈夫ですよ。怖くないですから」

きつと先輩は怖いものが苦手なのだろう。私は一人で教会の中に

入ろうと、足を進めた。

「久我山さん！」

山辺先輩の大きな声が聞こえた。それと同時に左腕が捕まれる。簡単に振り払えてしまえる弱い力だった。

「そういえば、返事をしていませんでした」

先輩は、なかば強引に話題を変えた。「返事」というのは、私の告白のことだということは分かりすぎるくらいに分かった。

聞きたくない。

そんな思いで一杯だったが、なぜか私は先輩の手を振り払うことができないでいた。

「すみません。久我山さんの気持ちは嬉しいのですが」

分かりきっていた答えなのに、私は涙が止まらなかった。

家に帰りたい。いや、この場で溶けていなくなってしまう良かった。

「そうですか。分かりました」

それだけ言うのが精一杯だった。教会のことなんてもう考えられない。私は先輩に掴まれている左腕を振り払った。

一瞬だけ、秋の冷たい風が吹いた。私の膝まで伸びた紺色のスカートがなびく。咄嗟に右手でスカートを掴んだ。どういっわけか、何も悪くないはずの秋の風に怒りを感じ、最後に山辺先輩を睨み付けてやるうと思った。ハンカチなど上品なものは使わず、セーラー服の袖でゴシゴシと涙を拭い、後ろを振り返る。

先輩は悲しそうな、困ったような顔をしていた。かわいそうなくらいに情けない表情だ。どうしてそんな顔をするのだろうか？ 今かわいそうなのは間違いなく私はずなのに。

私は怒りとも、悲しみとも言えない感情をどこにぶつけたら良いのか分からなかった。大声を出して泣いたり、ものを投げたりすればすっきりするのも知れないが、そんなことはしなかった。ただ、右手でセーラー服のスカートを強く握っただけだった。

「久我山さん」

そのとき先輩の静かな声が響いた。同時に再び腕を捕まれる感覚。先ほどとは全く異なる強い力で引つ張られる。

気が付くと私は山辺先輩に抱き寄せられる格好になっていた。今までで確実に一番山辺先輩に近い位置だ。耳元で聞こえる呼吸や、心臓の鼓動がひどく現実離れしているように感じた。

しかし先輩は私の愛の告白を断っておきながら、何を思っただけでこんな行動を取っているのだろうか？

そう考えながらも私は、強い力で私を抱きしめる山辺先輩の腕を振り払うことはしなかった。

「……僕は弱い人間です。どうしようもないくらい」

先輩は呟いているような小さな声でそう言った。

先輩が何を考えているのか私には分からない。けれど今だけはこうしていたかった。教会の探索はまたの機会にしよう。

私は無言で先輩の背中に手を回した。

秋の風は相変わらず冷たいまま、私の頬を撫でて行った。

その日ほど、学校へ行くのを躊躇った日はないだろう。文化祭二日目の今日は、クラス委員長の鈴木さんが楽しみにしているだろうミスコンテストが開催される日だ。

群青色の空が綺麗な今日は、昨日ほど暑くはなかった。良いミスコンテスト日和となるだろう。

私は昨日と同じく職員室から拝借した鍵で屋上へと侵入し、寝転んで青い空を眺めていた。視界の全てが空色だ。こうしていると、自分が空に向かって落ちていく最中なのではないかという錯覚に陥ってしまう。

「梢、探したんだよ。どうして、クラスにいないの？」

いきなり声を掛けられて驚いた。勝手に文化祭中は立ち入り禁止の屋上に入っていることがバレたら反省文を書かされてしまうかもしれない。びくびくしながら上半身を起こし振り向くと、最近顔を合わせていなかった葵がいた。

「なんだ、葵かあ」

脱力しながら安堵のため息をつく。しかし、なぜクラスの異なる葵がわざわざ私を探しに来たのだろう？

「なんだはないでしょ、なんだは。せつかく私が一生懸命探したつてのに。あんたのクラス、レポート用紙が床に散乱してたよ。せめて重石くらいは乗せなさいよ」

葵は自身の長くウェーブのかかった髪を耳に掛けながら、なかばあきれたように言った。私と同じセーラー服ではなく、フリルの付いた派手なピンク色の丈の短いワンピースを着ていた。正直趣味が良いとは言えない。

私は、葵のその奇抜な服装を凝視してしまっていたのだろう。葵は私の視線に気付き、口元を緩ませながら得意げに話した。

「この服ね、私の手作りなんだ！。メイド喫茶やってるから、ぜひ来てね」

きっと宇宙人のコスチュームプレイか何かなのだろう。文化祭で喫茶店をクラスの出し物として行うという話は、以前聞いたことがあったような気もする。

しかし、こんなにも奇抜な格好をしたウエイトレスがいる喫茶店に好んで入る客がいるのかどうかは甚だ疑問ではある。私は目の前にいる友人の趣味の悪さに小さくため息をつきながら、話を戻した。「で、どうして私を探してたの？」

私が訊ねると、葵は思い出したようにポンと手を叩いた。喫茶店の話をすることに夢中で本来の目的を忘れていたらしい。

「そうそう、なんか私ミスコンの代表者に選ばれちゃってさあ、一発芸とかやらなきゃいけないみたいなんだよね。どうしよう」

そこまで心配している様子ではなかった。どちらかというところ、私にミスコンテストの代表者に選ばれたということを自慢しているような口ぶりだ。

「落語でもしてみたら？ 意外性があって歌とかダンスとか歌より被らないと思うし」

私は葵が少し前に落語に嵌まっていたことを知っている。それこそ暗記するくらい好きらしいので、一席くらい披露できるのではないだろうか？

「うーん、確かに被らない気はするね。ありがとう」

葵はにっこりと綺麗な笑顔を見せると校舎の中へと戻って行った。歩きながら一人でぶつぶつと「秋っぽい話、秋っぽい話」と繰り返しているのを私は聞き逃さなかった。

再び一人になってしまった私は、寝転んでしばらく昨日のことを考えながら目を閉じた。山辺先輩は一体私を何だと思っているのだろう？ もともと変わった人なのかもしれない。受験ノイローゼというもので頭が沸騰してしまったのか？

色々な考えが頭の中を飛び交ったが、昨日あまり眠れなかったせいもあり、私の瞼は段々と重くなって来た。睡魔はいつでもどこでもやって来る。私は目の上にハンカチを乗せると夢の世界へと落ちて行った。

……私は夢を見ていた。

自分が夢を見ていると認識しながら見る夢を明晰夢というらしい。

夢の中の私は校庭を歩いていた。出店も、舞台も一切ない校庭はひどく殺風景だった。

不安になった私は辺りを見渡すが、校庭には人っ子一人いない。夏のようにジリジリと照りつける日射しが暑かった。

ふと、上を見上げると群青色の空が落ちてきた。なんともいえない浮遊感。もしかしたら空が落ちたのではなく、私が空に落ちたのかも知れない。

……暑い。

喉が乾いた。

そう思ったとき、私はスピーカーから流れる大きな機械音で目が覚めた。いやな夢だ。

ゆっくりと瞼を開くと、直射日光が顔に当たった、通りで暑いわけだ。どうしてあんな夢を見たのか分かったような気がした。

腕時計は午後の二時を指している。小腹が空いたような気もするが、私は先ほどの大きな音の正体を確かめようと屋上から校庭を覗いた。

昨日まで屋台が立ち並んでいた場所は特設ステージに変わっており、何人かの女生徒がステージに立っている。どうやらミスコンテストが始まったようだ。

一クラスに一人が代表として選ばれ、文化祭でグランプリを決めるミスコンテスト。私のクラスからは委員長鈴木さんが出場しているはずだ。

どうやらかなり選考は進んでいるらしい。勝ち進んだ者の中には着物を着た葵の姿があった。

鈴木さんは脱落したらしい。あれだけ準備をしていたのに残念なことだ。こんな結果になるくらいだったら、何かクラスの出し物でも企画してくれたら良かったのに。

私はそう不満に思いつながらも、葵が勝ち進んでいることに興味をそそられ、もう終盤のミスコンテストの様子を眺めることにした。葵は私のアドバイス通り落語を披露するようだ。

耳当たりの良い葵の落語は、純粋に楽しいと思えた。『目黒の秋刀魚』と綺麗な字でステージの端にあるめくりに書かれている。確かに秋っぽい話ではある。有名な演目だからか会場からは笑い声も起き、実際に声は聞こえないが見ているだけで、楽しいと思った。

最終選考の票の集計をしているとき、私は葵に一票入れておけば良かったと後悔した。クラスも違う、あまり親しくない友人だが、やはり葵は友達なのだ。私は葵が入選するようにと、キリスト教徒でもないのに両手で十字架を作り、天に祈った。

やはり投票しておけば良かった。葵は三位。グランプリでも準グランプリでもない中途半端な順位だ。

しかし一年生の中では一番という大健闘の順位だった。葵は着物のまま新聞部のインタビューも写真部の撮影も受けずに真っ先に私のいる屋上へとやって来た。

「やっぱ梢は着眼点が違うね。うん」

なにやら私を誉めているつもりらしい。馬鹿みたいに真面目な顔をつくり、一人で頷いている。私はなんとなくいい気分になった。

「そんなことないよ。私投票してないし」

私はミスコンテストなんて興味がない風を装って返事をした。屋上からハラハラしながら見ていたなんて口が裂けてもいえない。

「えっ、そうなの？　じゃあ私の実力かなあ？」

葵はそれまでの真面目だった顔を崩し、ふざけた声を出した。

「ちよつと、調子乗らないでよ」

「あははっ、分かってるって」

葵はそう言うのと校舎へ戻って行った。

私はそのとき、クラスメイトの誰よりも葵は本音を話せる友人であることに気が付いた。

思えば山辺先輩のことも葵にしか打ち明けていない。

「焼きそば買おうかな」

誰もいない屋上に私の一人言だけが響いた。私は立ち上がった思い切り伸びをすると、購買部へと歩き出した。

空は相変わらず群青色をしている。

三章 秋（3）

文化祭が終わると、途端にテスト一色になる。図書室で少しでも話すと摘まみ出されるし、授業をサボるうにも保健室の先生はまず熱を測つて来る。

文化祭の話題はクラスでは禁句だった。私として気が楽だったが、部活動で活躍していたクラスメイトは不満顔だった。

吹く風も冬のものといっても良くくらいに冷たくなり、上着を羽織る生徒も珍しくはない。

英語、補習だけは免れたいな。

私の悩みはそれに尽きていた。この前の中間事件では赤点ギリギリの点数で、おまけに緊張し過ぎて自分の名前を間違えて書いてしまったのだ。

青田先生が英語を担当しているというのも大きなプレッシャーだった。担任の先生の科目で赤点を取るのは、なんとなく気まずい。テスト一週間前になると、ほとんどの部活動は活動停止となる。

放送部も例外ではなく、テスト期間中は先生達が順番に放送を担当していた。

昼休みの廊下は騒がしい、歩いても歩いても目的地に着かないのではないかと思ってしまうくらい障害物が多い。私は図書室に本を返しに行こうとしていた。一週間も延滞しているので、司書の先生に何を言われるのか少し不安だった。

気分が沈み、無意識に下を向いて歩いていたようだった。前から来た誰かにぶつかってしまったのだ。

「す、すみません。ぼんやりしてて」

私はすぐさま本を拾い上げると立ち上がり、頭を下げた。

「ああ、いいよ別に。」

良かった。怒られずに済んだ。司書の先生にはどのみち嫌味を言われるのだから、こんなことで怒られたら本当に気分が沈む。

私は安心して、今度は誰にもぶつからないようにと顔を上げた。すると、知っている顔が目の前にあった。

「あれ、会長さん？ お久しぶりです」

高い身長、猫背気味な背中。開襟シャツはヨレヨレで、少し黄ばんでいた。それとは反対に纏っている雰囲気は明るいものだった。この姿を見るのは夏に会った以来だ。そのときはクラシック音楽を流さないことにけちをつけてきた。しかしどうして三年生の会長さんが一年生の廊下にいるのだろう。

「佐藤と以前名乗ったはずだが……君は放送部の久我山さんといったな。良かった、探していたんだよ」

どうして、私を探しているのだろう？ 正直私はテストのことで頭がいっぱいなだから放っておいてほしいものだ。

「なんですか？ 急いでいるんですけど、手短にお願ひします」

私はできるだけ素っ気ない言い方をした。春に入部をしに行ったときの会長さんの態度を真似てみた。

「いいから、その本図書室に返すのだろ。私が返しておくから話を聞いてくれ」

会長さんはそう言うと、私の持っていた本をなかば強引に奪い取った。そんなに話したいことはいったい何なのだろう？

「分かりました。話って何ですか？」

わずかな好奇心からか、私はそう返事をしていた。

「ここだと話し辛い。今日の放課後、校門で待っている。話はそのとき」

会長さんはそう言うと、図書室へ向かって歩いて行った。とにかく、司書の先生に怒られることがなくなって、ラッキーだと思うことにしよう。

午後の授業は英語だった。よりもよって一番苦手な長文の授業だ。一応予習はしてあるのだが、辞書を駆使しても意味の分からないことだらけだった。授業中は、当てられないように静かにしておこう。

「えーと、ケビンはエンプティーな缶を投げています」

こういう日に限って当てられるのだ。CDではエンプティーキャンと聞こえたのだが、キャンではなくカーン……頭が混乱してきた。ケビンの声は格好良いと思う。

「だからそのエンプティーって何だよ」

青田先生はイライラしながら言った。順番に一文づつ当てていくなんて聞いていない。予習してないと騒いでいた鈴木さんに答えられて、どうして予習をしてきた私がこんな目にあるのだ。

エンプティーは辞書では『無意味な』と書かれていた。

「無意味な缶？」

教室は失笑で包まれた。私はちゃんと辞書をひいたのにどうして笑われなければならぬのだ。

ところでケビンはなぜ無意味な缶を投げたのだろうか？ きつとカ

ルシウム不足に違いない。イライラは若者の敵なのだ。

「まあ、大体合ってるな。無意味な缶……空の缶とかで良いと思うぞ」

青田先生はそう言うと、次の人に長文の訳を聞いた。

放課後になると、私は普段より疲れていた。英語の授業のある日はいつも疲れるが、今日は一段と神経をすり減らした気がする。

私はとぼとぼと校門へと向かった。校門の側にある、葉の落ちたみずばらしい桜に親近感を覚えた。

「久我山さん」

声のした方に目をやると、会長さんが立っていた。私よりも先に待ち合わせ場所にいた。生徒会長とは色々と忙しいので、私が少し待つことになるかと思っていたので安心した。寒いなか、誰かを何分も待つのはあまり好きではないのだ。

「すみません、掃除が長引いてしまつて」

私は返事をしながら、会長さんの近くへ歩いた。話とは何の話だろう？

「そうか。あー、この辺りで流行っている心霊スポットを知っているか？」

会長さんの言葉を聞いたとき、私の頭には夏に青田先生が話してくれた教会が思い浮かんだ。昔流行った話題だとしたら、三年生である会長さんが知っていてもおかしくはない。

「山の近くにある教会ですか？」

「ああ、知っていたか。有名だからな」

会長さんは頭を掻きながら答えた。

「今から行ってみないか？」

会長さんはこういった類の話は信じない人だと思っていたので、私はその発言に驚いた。しかし、私はどうしてもあの教会には行きたくなかった。山辺先輩を思い出してしまうに決まっているからだ。「いや、それはちょっと」

断ろう。会長さんが何を話したいのかは全く分からないが、あの教会にだけはどうしても行きたくなかった。

「そう、行きたくないなら別に構わないが……ちょっと気になることがあってな、とりあえず立ち話もなんだから、ファミリーストランにでも行くか。もちろん費用は私が持つぞ」

会長さんはそう言うとお通りに続く道へ歩き出した。私も断る理由もないので、会長さんのあとを追った。巨大パフェとか頼んでも良いのだろうか？

ファミリーストランは思ったよりも混雑していなかった。しかし会長さんと二人きりだと恋人同士に思われそうでなんとなくいやな気分だ。

「私、巨大苺パフェが食べたいです」

カラフルな写真の載ったメニューには千四百円と書かれていた。

これほど高価なものこんな機会でもないと、食べられないだろう。会長さんは私の言葉を聞き、メニューの千四百円の文字を見ると少し眉をひそめたが、何も言わなかった。

会長さんは一番安い牛乳を頼んでいた。なんだか悪いことをした

気分だ。

注文が済むと、会長さんは真面目な顔で切り出した。

「孝之は今年からどうも様子がおかしいんだ。去年は後輩にまで敬語を使うやつじゃなかった。クラスでももつとノリが良くて、友達も多い方だったんだ。それに、私のことも『卓君』なんて呼んだりはしなかった。普通に『卓』と呼んでいたんだ。いつからあんなになったのか私は思い出した。文化祭の日、坂本みずきが失踪した日からあんなだったんだよ」

会長さんはそこまでを一度も息継ぎをせずに言い切った。

そうか、山辺先輩の口調を執拗に気にしていたのはそんな理由があったからなのか。確かにある日突然友達が敬語を話して来たらびつくりするかもしれない。

彼は呼吸を整え、また言葉を続ける。

「あいつは同じ時期に油絵を描いていたんだ。放課後の放送は私が代わっていた。どうせすぐ期末テストになったし、数週間ほど代わっただけだったよ」

そのとき店員さんが、巨大苺パフェと牛乳を持って来た。

美味しそうなパフェに私は目を奪われ、スプーンを手に取り、パフェをすくい、口に入れた。とろけるような柔らかい食感。ほどよい甘さと苺の酸味のハーモニーは最高だ。

会長さんは、牛乳で喉を潤すと続きを話し出した。

「私は知つての通り、クラシックが大好きでね。放送を代わっている間は毎日クラシック音楽を流し続けていたよ。孝之も、それまではクラシックを頻繁に放送で流していてね、今みたいに全くクラシックを聞かないということとはなかった」

私はパフェを味わいながら会長さんの話に耳を傾けていた。

山辺先輩の話聞いても、以前のように喜ぶことはなかった。聞けば聞くほど悲しい気分になるだけだ。

「私は山辺がクラシック音楽を流さないのは、文化祭の日前後に何かあったのが原因だと思う。クラシック聞くと思い出すのだから

う、その時期を」

会長さんは既に牛乳を飲み終えていた。私のパフェは、まだ半分ほど残っている。英語の授業で使った頭には甘いものが最適だ。

「どうしてそう思うんですか？」

私は一応会長さんに尋ねることにした。私にとってはもう山辺先輩が何をしていたようが、去年とどれほど変わってしまったていようがどうでも良いことだった。

「きつと、当時孝之が描いていた絵はコンクールで受賞したあの絵だ。昔はあんな絵は描いていなかった。確かに上手い絵だが、綺麗な風景画が得意だったんだ。それを……あんな……。きつと価値観を塗り替えられる大きな出来事が起きたに違いない！」

会長さんは声を荒げてそう言った。自分でも大きな声を出してしまったことに気が付いたのか、小さな声で言葉を続けた。

「すまない。しかし、あの失踪事件と孝之の変化は何か関係があると思うんだ。こんなことを君に話すのはおかしいかもしれないが、同じ放送部員なら何か知っているのではないかと思つてね。孝之について何か知っていることがあつたら教えてくれ」

私はパフェの半分溶けたアイスクリームを口に運んだ。

私は去年の山辺先輩を知らないのだから、気付くも何もないではないか。でも気になることは私にもあつた。

「クラシックをかけるなど言われました。入部してすぐに」

私は以前会長さんに嘘をついたことを認めた。

会長さんは小さく息を吐き出しながら、「やっぱりな」と言つて笑つた。

「……それと、山辺先輩はあの教会を恐れているように思います」私の告白を断つたときの、先輩の矛盾した行動。『断罪してください』というタイトルの生首を描いた気持ち悪い絵。教会へ行くのを拒んだ理由。そして行方不明の坂本みずきという生徒。

去年の放送部では、いったい何があつたのだらう？

「教会か……確かにあそこは怪しいな。しかし君は行きたくないの

だろう？」

「はい。それと、会長さんも行かないほうが良いと思います」

なんだかいやな予感がした。山辺先輩は、もしかしたら頻繁にある教会に赴いているのではないか？ 私はそんな気がしてならなかった。もし今から教会に行ったら、何かが崩れてしまうのではないだろうか？ よく分からないが、この一年間保たれていた秩序が崩壊するのではないかと思った。

「どうしてだ。君は孝之のことをなんとも思わないのか？ 私はてつきり君が……」

会長さんはそこで言葉を切った。さつきまでせわしなく動いていた私のスプーンが止まったからだ。

私は絶対に泣かないと決めていた。少なくとも家に帰るまでは絶対に。

「いや、別に良いんだ。私もこれから塾があるし……家に帰るとしよう」

会長さんは私の気持ちを察したのか、レシートを手に取ると席を立った。

私と会長さんは、ファミリーレストランを出た。

会長さんは店を出たあと、どこか哀愁のこもった目で財布を見つめていた。いったいどうしたというのだろうか？

「あー、えーと。それじゃあ送って行こうか」

その台詞に、私は驚いて会長さんを見た。会長さんは人を送るなんて親切なことをする人間ではないと思っていたのに、意外だ。

私は余程彼のことを見つめていたのだろう。

明後日の方向を向いていた会長さんが、私の方を向いた。

「なんだ？ 私は何かおかしいことを言ったか？」

会長さんは、訝しんだ顔で私を見ながら言った。

「あ、いえ結構です。まだ時間も早いし、会長さんに送っていただいても気持ちが悪いだけなので」

我ながらひどいことを言ったと思う。けれど、会長さんのその親

切な台詞には何か裏があるのではないかと疑わずにはいられなかった。

私は踵を返し、駅の方へ歩き出した。家へ帰る道で、駅を通るのは遠回りだが、いかんせん道が明るいので冬は専らこの道を使う。私がいやいや早足で歩いていると、後ろから会長さんの声がした。

「……気持ち悪いって君、それは言い過ぎではないか。だいたい私は君のパフェ代を払ったのだぞ。もう少し感謝してくれても良いのではないか」

会長さんはすぐに私に追いついて、隣を歩く。山辺先輩と歩いたときはあんなにドキドキしたのに、今は全くそう感じないのが不思議だった。

「それは、会長さんが言い出したことじゃないですか。それにこれから塾なんですよね。受験生だという自覚が足りないんじゃないやありませんか」

私は少し挑発しながら会長さんの意図を探った。

あの会長さんのことだ。ただ私と帰りたいから付きまとっているわけではなさそうだ。

「私は佐藤だ。そもそも君に受験生の自覚云々言われる筋合いはない。それに、孝之なら……」

私は、会長さんの口から山辺先輩の名前が出たことに狼狽した。つい先ほど、私が先輩のことを考えていたのを見破られた気分だった。

「山辺先輩なら、何ですか？」

私は会長さんに、言葉の続きを求めた。

会長さんはきつと、私が山辺先輩のことを好きで、かつ振られたということを感じていると思う。彼は彼なりに、私に気を遣って言葉を続けなかったのだ。

だからなのか、私が会長さんに続きを促しても、彼は口を閉ざしたままだった。しばらくの沈黙が続く。

人通りの多い道を歩いているはずなのに、騒がしいはずの周りの

音が全く聞こえなかった。

「私、山辺先輩のことが好きでした」

沈黙に耐えきれず、私は言葉を発した。どうせ会長さんはファシリレーターとしての私の態度で勘づいているだろうし、山辺先輩の秘密を知りたい気持ちは私も同じだ。

「でも振られたんです。あの教会で」

私は静かに事実を伝えた。

なぜ葵にも言っていないなかったことを、会長さんに話しているのだろう。そう考えるとなんだか、今この瞬間がとても滑稽な時間に見える。ええ。

私は少し笑ってしまったかも知れない。本当におかしくて笑ったのだが、会長さんから見たら自傷的な笑いに見られても仕方がない顔だったと思う。

会長さんの性格なら、振られた私を散々馬鹿にすると予想していたが、どうやら間違いだったようだ。

彼は、ただ静かに「そうか」と呟いただけだった。

会長さんは意外と良い人なのかも知れない。

山辺先輩の話題が出たことで、私は先輩に振られた日のことを思い出した。

文化祭の日に、先輩は学校を休んで教会にいた。確か、坂本さんが行方不明になったのも文化祭の日だ。

そのことに気付いた私は、駅へ向かっていた足を止めた。隣を歩いていた会長さんも、私に合わせて立ち止まった。

突然足を止めた私を不審に思っただのか会長さんが声をあげた。

「久我山さん？ ちょっと、大丈夫か？」

会長さんの掌が私の肩に触れる。僅かに伝わるその重さは、暖かかった。

「……行きます。私」

私は自分に言い聞かせるように強く言うと、くるりと左側を向き、暗い路地に入るうとした。

しかし、足を踏み出した瞬間。鞆を持っていない左手を会長さんに捕まれた。それは、そんなに強い力ではなかったけれど、私を引き止めるには十分だった。

「おい、行くつてどこに？」

会長さんは驚いた様子でそう訊ねた。時間はまだ早い、空はもう既に真つ暗だった。

教会があるのは隣町との境にある山だ。私達が歩いて来た、駅に通じる明るい道とは比べものにならないくらい危ない場所だろう。

それでも私は、もう一度あの場所へ行ってみたくなったのだ。

ファミリーレストランなんて寄らずに、初めから会長さんへ行けば良かったかも知れない。

しかし会長さんも暇ではないのだ。仕方がないが、今から私一人で教会へ行こう。

「教会です」

私は、それが自分の強い意思だということ強調するために、会長さんの目をしっかりと見据えて言った。会長さんは、そんな私の気持ちを理解したのかそうでないかわからないが、小さくため息をつき、了解の返事を口にした。

「分かった。私も行こう」

会長さんも私と同じように、私の目を見据え、きつぱりとした口調で言った。

「でも、塾があるって……」

会長さんの言葉に、私は少し狼狽しながら返事をした。

『受験生の自覚』云々語ってしまった手前、「はい、そうですね」と会長さんの言葉を受け入れるわけにはいかなかった。

「かまわない。それに、もともと私が誘ったのだしな」

会長さんは事も無げにそう言つと、悪戯っぽい笑顔を見せた。

初めから教会に行つていれば……。

私は申し訳ない気持ちになったが、だからといって巨大苺パフェの代金を会長さんに返すつもりは毛頭なかった。

「そつえばそつでしたね」

私はさらりと機械的に唇を動かすと、教会へ続く暗い路地を進んだ。

人一人通るのがやっとというくらいの細い道だ。道の片方は植物の壁で、もう片方は民家との仕切りであるブロック塀で形成されていた。

会長さんは何も言わずに、私の後ろを歩いてきた。

耳から聞こえるのは、二人分の砂利を踏む足音だけだ。

しばらく進むと、山道へ出た。砂利の敷かれた道が落ち葉の柔らかい道に変わり、足を進めるたびに聞こえるパリパリとした乾いた音が心地よかった。

「そつえば、妹と仲が良いらしいな」

私が静かな雰囲気を楽しんでいると、会長さんが沈黙を破った。

妹、とは誰のことなのだろう？

「妹さん、いらつしゃったんですか？」

「ああ、君は知らないのか？ 一年A組の佐藤葵。葵は君の話をたまにしているぞ。本当にたまにだな」

そこまで「たまに」という単語を連呼しなくても良いと思うのだが……。

しかし、会長さんの言うようにそこまで親しくないのも事実なので、私は相槌を打った。

「そうですね。まあ、それほど仲良くありませんから。……ていうか葵のお兄様だったんですか？」

私は驚いて会長さんを見た。葵に兄弟がいるなんて話は一度も聞いたことがない。

「なんだ、知らなかったのか。まあ葵も昔のように私を『お兄ちゃん』と呼ばなくなったのだけだな。時の流れは悲しいものだ」

会長さんは、そつ言いながらどこか遠くを見るような目をしていった。

「しかし、文化祭では世話になったらしいな。落語とは考えたもの

だ。私は『たがや』が好きだな。花火は最高だ」

落語の演目について語る会長さんは、葵にそっくりだった。私はそれをほほえましく思いながら「そうですか」と返事をした。兄弟のいない私には、そのような存在は羨望の対象だったのだ。

暫く足を進めると、鬱蒼とした道の先に教会が見えてきた。

「会長さんは、この教会のどんな噂を知ってますか？」

私が訪ねると、会長さんは真面目腐った咳払いをしてからゆっくりと話し始めた。

「私は戦時中の外国の幽霊説を推すぞ。外人の幽霊つてどんな格好で出てくるんだろうな？ 着物は着てないだろうし、綺麗なお姉さんだったら良いな。幼女も捨てがたいな。食人家族の話は突飛過ぎる」

「あはは、結構詳しいんですね」

会長さんがありえないことを口走っていたような気がしたが、きつと私の空耳に違いない。こんなお兄様を持った葵を羨ましいと思う気持ちも冷えていった。

教会の扉は簡単には開かなそうに見えた。大きく、何十年も扉として機能している威厳が確かにあった。

会長さんがそつと扉を押した。

ほんの少し、触れているだけのようにも見えた。それでも扉は軋んだ音ひとつ立てず開いた。

「誰も、いませんね」

私は、もしかしたら山辺先輩がいるのではないかと思っていた。

しかし、教会の前にはだれの姿もない。

私はふと、文化祭の日を思い出した。

山辺先輩は、私をこの教会に近付けさせまいとしていた。

何か理由があるのだろうか？

「そのようだな」

教会の中に足を踏み入れると、埃の匂いが鼻をついた。

そして、どこか懐かしい雰囲気を感じている。ステンドグラスが夕

焼けを通して、幻想的な風景を演出する。小さなオルガンにいくつもの色の光が映り、まるでオルガンそのものに色が付いているように感じた。

しばらくの間、私は目の前の幻想的な雰囲気言葉に言葉を失っていた。会長さんも同じだったのか言葉を発することはなかった。

私達は教会の中を歩きまわり、ときに座り、膝についてお祈りのポーズをとってみたりした。

五分ほど経った頃、会長さんがおもむろに声をあげた。

「お、おい」

教会の中では声が綺麗に響く。どんな原理かは分からないが、音が空から降ってくるように感じるのだ。

「どうかしました？」

私は会長さんのいる、オルガンの側へと歩いた。

静かな教会には、私の足音だけが聞こえる。新しい革靴は、コツコツと幻想的な音を出した。いつも聞いているはずの音なのに、どうしてこんなにも違って聞こえるのだろうか？

「……」

会長さんは、無言でオルガンの裏側を指さした。

指の先には、下へ降る階段が続いていた。覗きこんでみても、暗くて先が良く見えない。

「電気とか、ないですかね？」

私はそう言いながら、電気のスイッチを探した。

色つきの光で照らされた教会の壁を見渡しても、それらしきものは見当たらなかった。

「ああ、これか？」

カチリ、という音と共に、階段の先が明るくなった。

しかし、婉曲している階段の先は、降りてみないと何があるのか分からないままだ。

「……行くか」

会長さんが、静かに声をあげた。聞こえるか聞こえないかという

音量の掠れた声。

そんなに離れた距離に居るわけでもないのに、とても聞き取り辛いものだった。

「そりゃ、行きますよ」

私は自分を勇気付けるように、あえて大きな声で返事をした。

自分の声は数秒後、少し低い音程になってこきました。それは、会長さんの声と同じく、頭上から降ってくるように感じた。

「……だよな」

会長さんは、力ない返事をため息と共に吐き出す。

もしかすると、怯えているのかも知れない。いや、あの会長さんのことだ。こんなことでビビったりはしないはずだ。

しかし、会長さんの口調のせいで、なんだかおかしい雰囲気だ。

私はこの場の空気を変えるために、明るい話題を振った。

「知ってます？ 幽霊には、芳香剤が効くらしいんですよ」

幽霊の話をしたのは、きっと私もこの教会の噂を信じているからなのだろう。

根も葉もない噂話に過ぎないというのに、私は怯えている。

そう考えたとき、首筋を冷や汗が流れるのを感じた。

「なんだそれ？ トイレにあるやつか？」

会長さんは、私の言葉に静かな声で応じた。

明るい話につながる気配は感じられない。このまま放っておくと、

この妙な空気で覆われた場所から永遠に脱出することができないのではないか？

そう思うと、なんだか急に恐ろしくなった。

「昔の友達が言っていました。ということ、会長さん。トイレを消臭するやつとか持っていないませんか」

私が機械的に唇を動かすと、会長さんは動揺した早口で応じた。

「馬鹿か君は。そんなもの美化委員だとしても持ち歩いていないぞ。おまけに私は美化委員ですらない、生徒会長だ。分かっているのか？ その気になれば放送部なんて廃部にできるんだ。それをしない

のはなぜか分かるか？ 毎日の放送を生徒会が肩代わりするハメになるからだ。これ以上仕事が増えるのは真つ平だ。それにこの前の模試だって……」

長い長い台詞を話した会長さんは肩で息をしていた。

模試って……。

会長さんの成績なら模試の成績もかなり良いだろうに。高等専門学校にでも行くつもりなのだろうか？

会長さんみたいなタイプはロボットとかが好きそうだから、あなたが間違っていないかも知れない。

「会長さん」

私はゆっくりと口を開いた。

さっきまで、あんなに幽霊を恐れていたのに、会長さんの進路を予想している自分を滑稽に感じた。

「な、何だ」

「受験ノイローゼとか、気を付けてくださいね」

私は悪戯っぽい笑顔を作ってみせた。

そして会長さんに背を向けると、階段を降りた。

「あ、ああ」

会長さんの小さな返事が、背後で聞こえる。

それと同時に、『ギシッ』という、乾いた木材の音が耳に響いた。オレンジ色の光で照らされた階段は脆く、半分腐っているようだった。

足場が不安定な上、手すりもないので、私は壁に手をつきながらそろそろと階段を降りた。

「おい、速くしてくれ」

会長さんの声が後ろから聞こえる。

「うるさいですよ。上級生だからって威張らないでください。大体上級生だったら、先に行ってくださいよ」

私は、強い口調で答えた。会長さんの言う通りにするのは癪だったが、私は歩くスピードをあげ、なんとか階段を降りきった。

階段の先には、一つのドアがあった。それは、私よりずっと高い
会長さんの身長よりも大きかった。

小さな電球だけが頼りの、薄暗い空間にぼっかりと浮かぶドアノ
ブ。

「か、か、会長さん」

私は思わず後ろを歩く会長さんの方を振り返った。

「なんだ、ゴキブリでも出たか」

会長さんは悠長に階段を降りている。

私に速く歩くように催促しておいて、なんて人だ。

「ち、違いますよ。ほら、これ……」

私は左手の人差し指を、目の前にあるドアノブに向けた。

会長さんは目を細めながら、ゆっくりとドアノブに近づく。

「……血」

会長さんの、乾いた声が聞こえたような気がした。

ドアノブが元々が何色だったのかは分からない。私の目の前にあ
るそれは、赤黒いものがベツタリとこびり付いていたのだ。

「あおう、入ってみませんか？」

「な、何を言っているんだ。私にこれを触れと言っのか？」

会長さんは、ひどく動揺した声で答えた。

私に開けさせるつもりなのだろうか？ 全く、どこまで意気地のな
い人なのだろう。

「このドアを開ければ山辺先輩の秘密が少しでも解明されるかもし
れませんよ」

私はそう言いながら、会長さんの腕を掴み、なかば無理矢理にド
アノブを握らせた。

「……」

会長さんは無言で、ゆっくりとドアノブを捻った。しかし、半分
も回転しないうちに、その動きが止まる。

「鍵が、掛かっている」

会長さんの安堵の声を聞いた私は、階段の方を向いた。

ドアに鍵が掛かっていて、安心したのか、落胆したのか、自分でもよく分からなかった。

帰ろう。

そう思い、目の前の階段を見上げる。

「……！」

会長さんが、隣で息を呑むのが聞こえた。

降りているときには気付かなかったが、階段にはドアノブとは比べものにならない量の血液が付着していた。

私がぼんやりとそれを眺めていると、隣から会長さんの叫び声が聞こえた。

叫び声は地下に反響し、何度も何度も私の耳にこだます。

一瞬遅れて階段を駆け上がる音。これは声とは異なり、反響しなかった。

私はそれらを、どこか遠くで起こっている出来事のように感じていた。

地下に何の音も響かなくなってからやっと、私は我に返った。

寒い。

肌で温度を感じて初めて、言いようのない恐怖が襲って来た。

転ばない程度に気をつけながら、早足で階段を上り、電気のスィッチを切って教会を出る。

教会を出るとすぐに、会長さんの姿が見えた。

「何なんだ、あれ。まさか……」

会長さんが震える声で何かを言う前に私は話しを打ち切った。きつと食人家族の噂の話でもするつもりなのだろう。

「わ、分かりません」

狼狽した私たちが、無言で家路を急いだのは言うまでもない。

四章 冬（1）

十一月に入ると、途端にルーズソックスが羨ましくなる。

秋の寒さとは桁違いだ。

マフラーだけではなく、分厚いコートや、百円の手袋、ストッキングを履いてもなお、服の隙間からひんやりとした空気が入ってくる。

風景や空気も秋とは別物だ。

校門近くの桜は、すっかり葉が落ち、みすばらしい。女子達の纏う紺色のセーラー服で唯一目を引く赤いスカーフが目染みる。

私は少し息を吐いてみた。それは白い色になり私の前に姿を見せる。

今日はもう帰ろう。

私は、人気のなくなつた教室のドアを閉めた。冬の寒さは、慣れない。どうしたって暗い気分になつてしまふのだ。寒い国は自殺率が高いという話をどこかで聞いたことがあるが、納得してしまふ。

「久我山さん！」

誰かが私を呼んだ声が聞こえた。大きな声ではないのに、誰もいない廊下に響く。私は声のした方を振り返つた。

「山辺……先輩」

先輩に会うのは久しぶりだった。あの文化祭の日以来だつたと思う。正直な話、もう会いたくない。私は、先輩の顔を見ることができなかつた。

「あの、久我山さんをお願いします。今日の放送を代わつて下さい」

どういふわけか、先輩は言いづらそうに述べた。何か重大な決心でもしたような。

そうか、もう十一月に入る。三年生は受験で忙しいのだろう。葵に聞いた話では、多くの三年生達は、夏頃に引退するものらしい。

合宿にまで参加した、先輩が異常だったのだろう。

私はそう納得し、了解の返事をするつもりで口を開いた。しかし、声を発する前に、先輩は言葉を続けた。

「それと、文化祭の日には渡せなかった台本が完成したので、放課後の放送で読んで頂けると嬉しいですよ」

先輩はそう言うと、鞆から大学ノートを取り出し、私に手渡した。少しだけ指先が触れる。たったそれだけのことなのに、私の心臓は速くなってしまふ。

窓から射し込む西日が私の顔を照らし、冬だというのに額から汗が噴きだすのを感じた。

「分かりました。それじゃあ、受験頑張ってくださいね」

その一言を言うのが精一杯だった。私はまだ玉砕した初恋の傷が完治していないのだ。私は先輩に背を向けると、放送室へと足を向けた。

「久我山さん……！」

先輩の声が聞こえた、それと同時に左手が掴まれる。先輩の冷たい掌の感覚だけが、これは夢ではなく現実で起きていることだということを認識させた。

掌に、冷たいものが握らされる。何だろう？

「放送部の鍵です。もう引退するので、明日にでも青田先生に渡しおいて下さい」

先輩の声は、震えていた。何かに脅えているような。受験というのはそんなにもストレスの溜まるものなのだろうか？ 受験をしたことのない私には想像もつかない。

「分かりました。それじゃあ」

そのとき、私は泣いていたのだろうか？ 掌の冷たい鍵の感触しか分からなかった。

いつも通っているはずの廊下が、こんなにも長く感じられたのは初めてだった。数人の生徒とすれ違ったが、放課後らしいとても静かな廊下だった。

私は、ふと春に放送部へスカウトされた日のことを思い出した。あの日と同じ、夕日の色だ。オレンジ色で目に染みる。唯一あの日と違うのは、吹奏楽部の練習する楽器の音が聞こえないことだけだ。放送室に着いた私は、コートを脱ぎ、マフラーを取った。そして朝と同じようにパイプ椅子に座り、マイクの電源を入れた。

「あー、えーと、放送部からのお知らせです。文化祭の日に発表できなかった台本が完成したので、読んでいきたいと思います。時間のある方は聞いて頂けると嬉しいです」

私はそう言っ、先輩から受け取った大学ノートを開いた。ぎっしりと、流れるような綺麗な文字が並んでいる。

私は大きく息を吸い、深呼吸をした。

皆さんは、学校のチャイムというものを聞いて、どんなことを思うのでしょうか？ 僕が始めてそれを聞いたのは、小学生のときでした。まだ、ランドセルが身体よりも大きかったときのことです。初めて教室というものに入り、初めて教科書というものを開いた。そんな、とても昔の話です。

初めて学校のチャイムを聞いたとき、僕はひどく興奮しました。これから学生という身分になる。当時の私には学生というものがない。でも立派で、大人の仲間入りでもしたような身分であるように聞こえました。サラリーマン、主婦、教師、アルバイト、それらの単語と肩を並べても違和がない。そんな言葉なのです。

しかし、一ヶ月も経たないうちに、あれほどまでに僕を興奮させた音色が、単調で、つまらない、むしろ不安を助長させる耳障りな音へと変貌したのです。その原因は、僕の学生生活にありました。

毎日毎日、同じことの繰り返し。大きなランドセルを背負って、眠い目を擦りながら学校へ向かい、騒音で訴えられても無理のない教室へ足を踏み入れる。

そのときが、僕にとってもっとも嫌いな時間でした。一番気を遣

うからです。

素早く友人の顔を探し出し、「おはよう」と元気良く挨拶をする。僕の掌は、じつとりと汗で湿っています。心臓もバクバクと激しく動き、シャツの上からでも鼓動が分かってしまうのではないかと心配するほどです。

友人は今日もまた、いつもと同じように挨拶を返してくれるだろうか？ そんな不安を常にしていたのです。

そんな僕が、学校という場所で唯一安心できる時間がありました。授業時間です。

そもそも学校という場所へは、授業を受けるために通っているのです。先生の話の聞いている間は、友人の顔色を伺わなくても良い。いちいち友人の話に対し、感想を述べなくても良い。その事実が、僕をとて安心させてくれました。

皆さんは、こんなことを考えていた僕をどう思うのでしょうか？

友人に気を遣うなんておかしい。小学生のくせに授業時間が好きだなんて変わっている。そんな感想を抱くのでしょうか？

それとも、自分も同じだ。それが当たり前だ。今、まさにそんな気分だ。といったことを思うのでしょうか？

念のため断わっておきますが、僕はいじめられたりはしていませんでした。いじめ、というものを客観的に判断することは、難しいと思いますが、当時の僕は、クラスでも目立ちこそしないが、休み時間に遊ぶ友人に困ったりはしない、そんな立場でした。

僕の大好きな授業時間と、大嫌いな休み時間を区切っているものが、あの忌まわしきチャイムでした。

もちろんそれは、大嫌いな休み時間から大好きな授業時間へと僕を誘ってくれるものでもあったのです。

しかし、あるときは甘い音色、またあるときはひどく残酷な音色。同じ音程、同じリズムを刻んでいるというのに、どうしてこんなに、全く別の感情が添えられるのでしょうか？ 僕はそんな、コロコロと聞こえ方の変わる音楽を嫌いました。

中学生になったとき、僕は放送部という部活に興味を持ちました。そのときにはもう、学校のチャイムに対し、以前のような嫌悪感は抱かなくなっていました。小学校の六年間という長い時間をかけて馴れたのでしよう。

皆さんもご存知の通り、この学校の放送部は廃部ギリギリの人数です。僕が入学した年の放送部も、今と同じ扱いでした。朝、昼、放課後の放送を、僅か三人という人数で担当していました。

一年生の僕は、部員の暗黙の了解によって、朝の放送を担当することになりました。

毎朝の早起きは、馴れてしまうと、それほど苦痛ではありませんでした。少なくとも、六年間でやっと馴れた、大嫌いな音色よりは、ずっと簡単に僕の生活に溶け込んだのです。

放送部に入部してからの僕の一年は、今までの学生生活で一番、学生らしい日々を過ごしていたと思います。

中学二年になった僕は、放課後の放送を担当していました。

毎朝早く家を出る生活から、毎日家に帰るのが遅くなる生活に変わったのです。その生活も、去年と同ように一ヶ月程度で慣れることができました。

彼女に初めて会ったとき、日本人形のような顔だ。そう思いました。

真っ直ぐ腰まで伸びた黒い髪、それとは対照的に透けるような白い肌。僕にはそれが、ひどく神秘的なものに見えました。

長い睫毛は、彼女が瞬きをする度に、まるで生きているかのような輝きを放ちます。黒目の大きな瞳も、それだけを抉り取り、どこかの博物館に展示されていても違和感がない。宝石のようなそれは、僕の特徴のない顔を映します。

綺麗に通った鼻筋、これだけは日本人形というよりは、フランス人形に近いと思いました。欧米人のようにスツと伸びたそれは、何時間眺めていても飽きない。そう思わせてくれました。

薄い唇は、可笑しくて堪らないときに歪められた形が、僕にとつて一番美しく見えたのです。無表情のときよりもずっと、綺麗に見える不思議な場所です。

少し力を加えたら折れてしまうのではないか、と心配するほどの細い指。スカートをギュツと握っています。青い血管が浮き出て見えて、彼女は人形ではなく本物の人間なのだ。そんな当たり前の事実を主張しているようにも見えました。

その指に握られた、膝丈のスカート。そこから伸びている足は、流行のルーズソックスではなく、紺色のハイソックスを纏っています。それは、今まで僕が見てきたどんな足よりも良い形をしています。ほどよい肉付き、チラリと見え隠れする膝小僧もまた僕を興奮させる要因のひとつでした。

彼女は、放送部の入部希望者でした。顧問である青田先生がスカウトしてきた人間であることは、声を聞いた瞬間、理解することができました。

「一年B組の坂本みずきです。よろしくお願いします」
彼女は、スカートを強く握りながら僕の方を見て、呟くように言いました。聞こえるか、聞こえないかという音量だったのに、当時放送部でメインを張っていた三年生の声よりも、透明感があり、昔僕が嫌っていたあの音楽とは対照的に、ひどく耳あたりが良く聞こえました。

僕は、初めて彼女に会ったとき、日本人形のようにだ。と思いました。坂本さんのその声を聞いた後、僕は何を思ったのか、やはり人間だった。とは思いませんでした。『なんて完璧な人形なのだろう』そう思ってしまったのです。

幸い、僕のそんな恐ろしい感情の変化を、部員はもちろん、この学校では変態ということでは有名な青田先生でさえ気付きませんでした。

坂本さんは、例のごとく朝の放送を担当しました。彼女の声で一日が始められていた当時を知っている人は、彼女の放送がどれほど

素晴らしいものだったかを知っているでしょう。

僕は、彼女の放送を聞くためだけに、一年生のときと同じ時間に学校へ出かけるようになりました。

毎朝八時きっかりに聞こえる坂本さんの声。誰もいない教室で、あるときは高く、あるときは低く変化する声がありなす放送を聞くことが、僕の唯一の楽しみでした。

四章 冬(2)

そんな幸せな毎日が過ぎてゆき、同じ放送部員である僕と坂本さんは、少しずつ言葉を交わす仲になってゆきました。

始めは事務的な内容だった会話も、校門の桜が散り、青々とした葉を付け始めた頃には、試験の内容について、お互いの好きな食べ物、昨日見たテレビ番組について、のような他愛もないものに変わってゆきました。

僕は一年生のとき、女子の制服が夏服に変わるというだけで、なぜクラスの友人達は、あんなにもはしゃいでいるのか全く理解できませんでした。

しかし、坂本さんに出会った後の二年生の僕は、彼らの気持ちが手に取るように分かった気分になりました。

僕は、夏用のセーラー服を纏った坂本さんを見るだけで、額や掌、背中からじつとりと汗を流しました。

暑さのせいではありません。日直のときにクラス全員の前に立ち、号令をする。丁度そのときの、緊張感に近いものがありましたから、半袖のセーラー服を着た坂本さんを見た僕は、ひどく緊張していたのでしよう。

この学校の女子達は全員同じセーラー服を着ているというのに、坂本さんが着たそれと比べると、何だかひどくみすばらしいものを纏っているように見えました。目に滲みる真っ赤なスカーフ、紺色のスカート、それら全てが同じデザインのものであるとは、にわかには信じられない事実でした。

「あ、あのう、山辺先輩。今度の中間試験のことなんですけど……」
坂本さんに声を掛けられて、僕は我に返りました。それまでずっと、ぼんやりと坂本さんのことを考えていたのです。いいえ、坂本さんに出会ったその瞬間から、僕の頭は彼女のことしか考えていなかったと言っても過言ではありません。

薄暗い放課後の部室には、僕達二人しかいませんでした。窓からは夏の西日が射し込み、ジリジリと部屋を温めています。オレンジ色の空には大きな入道雲が浮かんでいるのが見えました。

「え、ああ、中間ね。中一の間は簡単だから、そんなに気構えること無いよ。それにまだ一週間前にもなっていないじゃない」

僕は坂本さんを安心させるために、そう言葉を返しました。閉めきった部室は蒸し風呂のような暑さで背中を汗が一筋、流れてゆきました。

考えてみれば、一年生である彼女は、中間テストというものを受けたことがないのです。去年の僕がそうであったように、彼女もまた知らないものに対する不安を抱いていたのかもしれない。

僕はそこまで考えると、すぐに言葉を続けました。

「まあ、僕で良ければ何か手伝うけど」

こんなことを言ったのは、坂本さんのため、という建前ももちろんあったのですが、あわよくば彼女と一緒に勉強ができたら良いのに。そんな願望もチラリと頭を掠めていました。

僕の言葉を聞くと彼女は口角を上げ、目を少し細めて笑って見せました。

薄い唇はこの瞬間、一番輝くのです。僕は坂本さんのその表情が見られただけで、とても幸せな気分になりました。部室には二人しかない。そんなシチュエーションも手伝って、僕はひどく興奮しました。

暑い部屋の中にいるというのに、さっきまで感じていた温度がなくなっただかのように感じました。皮膚という皮膚が鳥肌をたてています。

「本当ですか？ ありがとうございます」

坂本さんは、明るく、嬉しそうな言葉を発しました。笑っている顔を、さらにクシャクシャの笑顔に変え、鞆から教科書や筆記用具を取りだし始めました。

僕は、初めて彼女のそんな顔を見ることができたことに感動し、さ

らに鳥肌をたてることになったのは、言うまでもありません。

坂本さんは数学が苦手でした。ノートに書かれた方程式を睨んでいる姿は、美術の教科書で見た美しい彫刻のように見えました。

「やっぱり難しいですね、数学」

彼女はそう言いながら、眉にしわを寄せ、ちつとも日に焼けていない手に持ったシャーペンシルをクルリと器用に回転させました。僕はその様子を見て、その細い指の間に挟まれたシャーペンシルになれたらどんなに良いだろう、そう思ってしまった。

「いや、違う。そこは連立方程式を……」

僕は、坂本さんがシャーペンシルを走らせているノートに目をやりながら言いました。さっきまで鳥肌をたてていたというのに、一気に部室の蒸し暑さがぶり返して来ます。ゆっくりと額から汗が流れてゆくのを感じました。

「え？ どこですか？」

坂本さんはそんな言葉と共に、ノートを僕の方へ向け、少しだけ僕に近付いて来ました。半袖のセーラー服から伸びた細い腕が、僅かに僕の肩に触れます。

もちろんそれらの行動は、ノートを見易くするために行ったものです。

僕は、そんなことは十分に理解していましたが、僕の心臓の鼓動が坂本さんに聞こえてしまうのではないか？ そんな心配をしてみうほどの距離に彼女がいるので、とても驚きました。

だって、つい数ヶ月前までは話をすることも困難であったのです。僕はリアルな夢を見ている。そんな錯覚に陥ってしまうほど、心地好い瞬間でした。

「えーと、ここはYにXを代入して……」

僕は、坂本さんのことを考えるのに精一杯でしたが、必死に頭を回転させ、どうしたら分かりやすく連立方程式を説明できるのかを考えました。その甲斐あってか、僕の拙い説明でも坂本さんは理解してくれました。

初めは首を捻り、頬杖をついていたのに、次第に僕の説明がなくても「こうですか」という声と共にサラサラとシャープペンシルを走らせるようになりました。

そのページにある教科書の問題を全て解き終えたときです。先ほどまでオレンジ色だった空が、灰色に変化し、部室も電気を付けなないと何がどこにあるのか分からないほど真っ暗になりました。

僕は時計を確認し、最終下校時刻にしなければならぬ放送をすっかり忘れていたことに気付きました。坂本さんもそのことに気付いたようでした。

「あつ、もうこんな時間ですね。宿直の先生に会わないように帰りましょう」

坂本さんはそう言いながら、机に広げられた勉強道具を鞆の中に詰め込みました。

僕は、いつも行っている放課後の放送を忘れたという事実には狼狽しました。きっとそれでも青田先生に怒られるということはないでしょう。僕が一年生のときも、度々放送を忘れてしまう先輩がいましたが、誰も何も言いませんでした。

けれど僕にとって放送を忘れるということは、とても重要な意味を持っていました。例えば、朝ごはんを食べていない。例えば、宿題をしていない。例えば、シャープペンシルの芯の買い置きが筆箱に入っていない。それらと同じようにその事実が、僕を不安にさせました。

「山辺先輩？ どうしたんですか？ ぼーとして」

坂本さんの声を聞いたとき、僕はどういっわけかひどく安心しました。あの耳あたりの良い声は、ときに僕を凶たくしてくれるということに、始めて気付きました。

「ごめん、ごめん。じゃあ、帰ろうか」

僕は努めて明るい声を出しました。坂本さんと二人きりで下校できる。そんなチャンスはこのときを逃したら、もう二度と来ることはないでしょう。

僕は部室の鍵を閉めると、それをポケットにしまいました。放送部では、放課後の放送を担当する部員が、鍵のスペアを持つことができます。だから、手元の鍵をわざわざ職員室に返す必要はありませんでした。

午後九時を回った廊下は、非常灯の緑色の灯りだけで照らされていました。そこに僕達二人だけの足音が、響きます。今にも血まみれの幽霊が歩いて来てもおかしくはない。そんな雰囲気でした。

そんなことを考え、僕は少しだけ夜の学校という、生活感の欠片もない場所に恐怖心を覚えました。

ふと、坂本さんの方へ目をやると彼女は、背筋をシャンと伸ばし、ひどく退屈そうな横顔をしていました。

そんな坂本さんを見て、僕は、幽霊を怖がっていた少し前の自分を恥ずかしく感じました。

コツコツと暗い廊下に二人分の足音が響き、しばらく無言の時間が続きました。

何だか気まずい……。僕から話し掛けるべきなのだろうか？ そう思いながらも、僕は何も気の利いた言葉を捻り出すことができませんでした。

下駄箱に到着すると、昏間とは対照的な、夏の夜の涼しい風が僕の頬を撫でます。坂本さんのセーラー服のスカートが捲れ、骨張った膝小僧が一瞬だけ顔を覗かせました。そのときです。

「山辺先輩って、怖いのが苦手なんですか？」

坂本さんの清んだ声が聞こえて来ました。どこかあどけなさの残る、子供のような声。それは何か面白がっている風にも聞こえました。

彼女は下駄箱の扉を開け、上履きをしまい、黒光りするローファ―を取り出しています。

「確かに得意ではないけど、特別苦手でもないよ。どうして？」

僕も坂本さんと同じように、下駄箱から靴を出し入れしながら答えました。校庭に出ると、今までよりもずっと涼しい風が身体に当

たり、僕の額に流れた汗を乾かしてくれました。

「だって、廊下を歩いていたときの山辺先輩。面白い顔してたから」
坂本さんは、クスリと笑いながらそう言いました。少し下を向き、口を手で隠しています。長い髪が風になびいて、一瞬だけ僕の視界から坂本さんの顔が消えました。

なんだか馬鹿にされているような気がしましたが、不思議と嫌悪感などは抱きませんでした。

「だって公共の場所の夜って、全くと言って良いほど生活感がないじゃない？ それが怖くてさ」

本当は「怖くなんかない」「ホラーは大好きだ」そんなことを言っただけ強がってみたいと思っていました。

しかし、いざ口を突いて出てきた言葉は、僕の本心にとっても近いものでした。

坂本さんの前だと、本心を話すことができる。この事実が、僕にとっただけだけ重要な意味を持っていたか、十年と少し生きた人間なら、簡単に理解することができるでしょう。

「確かに生活感のない場所は怖いかもしれませんね。廃墟とか、そうですね。お化け屋敷とかも、廃病院を改築したところは雰囲気出ていますね」

等間隔で配置された蛍光灯で照らされた道を歩きながら、坂本さんは言いました。コンクリートで舗装された道に、影が伸びては短くなり、濃くなつては、薄くなりを繰り返していました。

そういえば、坂本さんの家はどつちなのだらう？ 時間も遅いし、近くまで送って行った方が良いのかも知れない。

女の子と一緒に下校することは初めてのことでしたから、僕はいつそのことを切り出そうかどうか迷いました。しまいには僕の頭の中は、そのことについてぱいになってしま、坂本さんの言葉にどう返して良いのか考えられなくなっていました。

「あの、山辺先輩？」

僕は随分と長いこと、頭を巡らせていたのでしょう。大通りの交

差点まで、辿り着いていました。

黄色の光に照らされた車道は昼間のような明るさでした。歩道沿いは、カラオケ店や、昼間はいつも閉まっている飲食店の看板が、よう々な色で発光していて、幻想的な風景でした。

僕はしばし、普段は決して見ることはない風景を眺めました。この場には、学生服の自分達は相応しくないのではないか？ そんな不安が頭をよぎります。

「山辺先輩！」

坂本さんが、強く僕の名前を呼びました。心配そうに僕の顔を覗きこんでいます。彼女の凜とした声で、僕は我に返りました。

「ごめん、ぼーとしてて。近くまで送って行くよ」

僕はずっと喉の奥に挟まっていた言葉を言いました。坂本さんは僕の言葉を聞くと、ほんの少しだけ微笑んでくれました。普段から彼女のことを目で追っている僕でさえ、その表情の変化は気が付きにくいものでした。

「ありがとうございます！ 私の家、こっちですから」

坂本さんは僕に話し掛けながら、交差点の向こう側を指差しました。赤く光る信号がその先に見えます。

僕はまた無言で気まずい時間が二人の間に流れることを恐れ、ゆつくりと口を開きました。

「坂本さんは、お化け屋敷とかよく行くの？」

僕が訊ねると、坂本さんは笑いました。まだ子供らしさの残る顔。笑うと、それが顕著に表れます。

「ええ、まあ。先輩は行かないんですか？」

信号が緑色の光を放ち、それまで走っていた車が、まるで僕達のためだけに道を開けてくれたように停車しました。

僕は、昼間のような黄色い光で照らされた横断歩道を進みながら、舞台役者にでもなった気分になりました。隣に坂本さんがいることもまた、僕をそんな気分させた一つの理由なのかもしれません。

「僕は、そういうところは行かないなあ。近所であれば行ったかも

知れないけど」

そうなのです。皆さんもご存知の通り、この学校の近くには遊園地やショッピングセンターといった大層なものはありません。電車で三十分ほど揺られないと、楽しめないので。

横断歩道を渡りきり、僕は坂本さんの歩調に合わせて、ゆっくりと歩を進めました。

「そうですね。電車代、もったいないし。でも、お化け屋敷じゃないんですけど、この辺に心霊スポットがあるらしいんですよ」

坂本さんは、民家のたくさんある集合住宅地へ通じる道へ歩きながら言いました。

さっきまでの華やかな風景がさっと視界から消え、車の走る音で騒がしかった雑音も小さくなりました。

「心霊スポット？」

僕は驚いて聞き返しました。近所にそのような場所があるなんて事、一度も聞いたことが無かったです。廃墟すら見たことはありません。それに廃墟は許可を取らないと入ることができないというのも聞いたことがあります。

僕は、余程普段とは異なる声を発したのでしょうか？ 坂本さんは、クスリと鼻から息を吐き出しながら笑っていました。

「ええ、私は行ったことはないんですけど、友達がめっちゃ怖かったって言っていました」

坂本さんは、夜空を見上げながら僕の問いに答えました。その横顔はいつもよりも青白く、とても美しい美術品のようでした。

僕もつられて頭上に目をやると、星がポツポツと点在していました。きつと部室から見た入道雲でほとんどが隠れてしまっているでしょう。歩いている道は、僕の知らない風景へと変わってゆきました。辺りには団地と思われる、壁に数字の書かれた四角い建物が増えてゆきました。

坂本さんの話を聞いて、僕はめっちゃめっちゃ怖いというその心霊スポットに、興味を持ちました。

「へえ、どんなところなの？」

僕がそう言うと坂本さんは、少し眉にしわを寄せ、何か考えているような表情を作りました。それは方程式を眺めているときの表情と全く同じものでした。

どんどんと周りには、数字の書かれた建物が増えてゆきます。歩いている道は、舗装されているコンクリートから、草の生えた道と呼べるかどうか分からないものに变化してゆきます。視線を横にずらすと、ゆっくりと流れてゆく川が見えました。

「さあ、行ったことがないので良く分からないんですが、その友達によると教会なんだそうですね。」

教会、という単語を聞いて僕の頭に浮かんだものは、たくさんのステンドグラスでも並べられた机でも中央にあるイエスよ様の像ではありませんでした。書物で得た曖昧な知識しかなかったのに、僕にとって教会という場所は、ひどく陰鬱として退屈な場所というイメージを抱かせました。それもこれも、僕が今までそういった場所に入ったことがないから思うことなのでしょう。

しかし、そんな場所が心霊スポットとなるのだろうか？ 外国人の幽霊が出てきてもあまり怖いと感じないと思います。やはり、髪の毛の長い女の人の幽霊が出てきた方が雰囲気もあって良いと思う僕は、ホラーというものが分かっていないのかも知れません。

僕がひとしきりそんな事を思っていると、坂本さんが言葉を続けました。

「それで、私も行ってみたいんですね。先輩、今度連れて行ってくれませんか？」

僕は驚いて坂本さんの方を見ました。吃驚しすぎて呼吸が一瞬止まってしまったほどです。涼しい風で乾いたはずの汗が、また噴出すのを感じました。

「どうして？ 友達と行ったら良いじゃない」

素直に頷けば良いものを、僕はそんな事を言ってしまったのです。直後、自分を心の中で激しく責めたてました。

僕が自分の口から発せられた言葉を悔やんでいると、坂本さんの先ほどまでとは違う、小さな声が聞こえました。

「友達は、そういうの苦手な子ばかりなんですよね……その話をしてくれた友達は別のクラスですし」

小さく、悲しそうな声でした。

僕はなんてことを言ってしまったのだろう。そんな後悔の波が、どつと押し寄せて来るようでした。

「そっか、じゃあ今度一緒に行こうか」

僕はすかさず言葉を返しました。

丁度そのとき坂本さんは、一つのアパートの前で立ち止まりました。古く、二階建てのアパートは階段の手すりが錆びて捲れていました。

「本当ですか？ 約束ですよ」

坂本さんは、僕を後悔の念に追いやった声とは全く異なる声を出しました。

そして、透けるような色の細長い小指を僕の方へ突き出しました。

月明かりに照らされたそれは、まるで人間のものとは信じられないほど美しいものでした。

その指は、指切りをするために差し出されたものだということは、すぐに分かりました。

僕は、自分のゴツゴツした不恰好な指を彼女の美しいそれと絡ませることに少し躊躇しました、しかし、またそれと同時に興奮もしたのです。

「ユーびきーりげーんまーん嘘ついたら針千本のーます」

坂本さんの可愛らしい声が、夏の夜に響きます。

僕は指切りをしている間、指の感覚が全くと違って良いほどありませんでした。彼女と絡ませた指をほどいたとき初めて、右手の小指がジンジンと、そこだけが別の生き物だと錯覚するほどの異常な感覚が僕を襲いました。

「それじゃあ私はここまでで大丈夫なので。送って頂きありがとう

「ございました」

坂本さんはそう言うと、小さな掌を僕に振って見せました。

僕は、いつまでもその様子を見ていたい衝動に駆られました、踵を返し、後ろ髪を引かれる思いでその場を去りました。

坂本さんと別れた後、僕の心臓はこれまでにないくらいの速さで血液を送りだしているのを感じました。

翌日は案の定、放送を忘れた僕を詰る人物は現れませんでした。

しかし夏休みも終わり、もうすっかり夏の暑さと言うものがなくなってしまうから、坂本さんが放課後の部室に姿を見せることはありませんでした。その年は毎年行われていた合宿が中止になっていましたから、それから僕が坂本さんに会うことはなかったのです。

あの、涼しい夏の夜にした約束を彼女は覚えているのだろうか？

もしかしたら忘れてしまったのかも知れない。

そんな思いも頭を掠め始めた頃のことです。文化祭が近づき、学校中がどこか浮き足だった雰囲気でした。

僕はそんな浮わついた空気を嫌いながらも、密かに一日ずつ確実に近づいて来る文化祭の日を楽しみにしていました。

それというのも、放送部も例に漏れず他の部活と同じように、出し物をするようになっていたからです。僕が一年生のときは確か、文芸部の作品を先輩が朗読していました。

当時の三年生の先輩は、もうとつくに引退している時期でしたから、坂本さんと二人きりになることができる大きなチャンスだと思っていたのです。

企画の段階では、その年も昨年と同ように文芸部の優秀作品を朗読することになっていました。文化祭の朗読は女子がすること、と決まっていましたから、坂本さんが作品を読むことになるであろうことは、春の段階から決まっていたと言っても過言ではありません。もしかしたら、そのときは既に坂本さんの手には、台本が渡され

ていたのかも知れませんが。

一年生のときと同ように、僕は文化祭のことを何も知りませんでした。どうせ知っていたとしても、僕にできることなんて限られていますから、どっちにしたって僕のとる行動は変わらないのです。

「おい山辺、お前部室の鍵持ってないか？」

僕がいつものように、放課後の部室でくつろいでいると、青田先生がドアを開け、そこから顔を覗かせました。黄ばんだシャツからは、遠くからでも分かる煙草の匂いが香ります。

「持ってますけど、僕のはスペアですよ。青田先生は持っていないんですか？」

僕は、煙草の独特の匂いに顔をしかめながら言葉を返しました。

ドアが開かれたとき、一瞬でも坂本さんが来たのではないかと考えた自分を、馬鹿らしく思い、心の中で青田先生を詰りました。

「それがさー、どうもなくしちまったみたいなんだよな。コピー作んのも面倒だし、文化祭の日はお前が鍵閉めてくんねえ？」

先生は、壁に片手を付きながらダルそうに話しました。肩を回し、首に掌を当て、疲れているようなポーズをとっています。

「分かりました。それじゃあ僕が鍵のコピー作ってもらいますよ。部費からとつても構わないですよね」

青田先生の面倒なことが嫌いな性格は分かりきっていることですから、僕はそう返事をしました。

予想通り先生は「おう」と短く言葉を発した後、すぐにドアを閉め、部室から出て行ってしまいました。

四章 冬(3)

文化祭当日になっても、僕は青田先生に部室の鍵を渡すことはありませんでした。それは、文化祭について何も説明をしてくれない先生への当て付けだったのかも知れません。

結局僕は、坂本さんの綺麗な声で読まれる朗読を放送室ではなく自分の教室で聴くことになりました。そこには、クラスメイト達が情性で作成したと思われるレポートが、乱雑に掲示されていました。当然、それらの掲示物を見るために足を止める人などはおらず、教室中はガランとしていて、騒がしい学校中で、唯一静かな場所なのではないかと思うほどでした。そこは、坂本さんの放送を聴きたい僕のために用意された部屋のようにでした。

文化祭の間、僕は部室に一度も顔を見せることもなく、友人達と出店で買った食べ物を食べたり、演劇部の講演を見たり、そんなことばかりしていました。

下校時刻、日が落ちる時間が急に早くなり、まだ六時だというのに空の明るさが失われ始めた時間。

僕は青田先生に部室の鍵を閉めるように言われていたことを思い出しました。それに、通常どおり下校の放送をしなければなりません。ひんやりとしたドアノブに手を掛け、手首を捻り部室に入りました。

「あつ、先輩。お疲れようです」

坂本さんでした。夏以来会っていませんでしたが、全くあのときと変わっていませんでした。夏休みに旅行などには行かなかったのか、肌の色も相変わらず白いままです。

僕は、彼女がまだ部室にいるとは思っていなかったものですから、驚いたと同時にとても嬉しく思いました。

「放課後の放送ですよ。どうぞ」

そう言うと、坂本さんは座っている椅子から立ち上がり、帰り支

度を始めます。

僕は、そんな様子を見ながら最終下校時刻を知らせる放送を始めました。毎日繰り返している台詞を言い終え、マイクの音を切り、靴を手にとりました。

窓の外はもうすっかり暗くなっています。僕は思わず、坂本さんと一緒に下校したあの日を思い出してしまいました。

「そつえば先輩、あの教会の場所が分かったんですよ」

おもむろに坂本さんが声を発しました。スカートを握りしめ、真っ直ぐに僕の方を見えています。スカートを握るのは彼女の癖なのでしょうか？

その姿を見たとき、僕は初めて彼女と会ったことを思い出しました。

『一年B組の坂本みずきです。よろしくお願ひします』

確かそう言っていたと思います。その声を聴いたとき、僕は……。

「だから、今から一緒に行きませんか？」

僕は、再び窓の外へ顔を向けました。外の風景は、以前坂本さんと帰ったときよりも暗いように感じました。

「今から、つてもうかなり遅い時間だよ。家の人も心配するし、また今度にしよう」

そうですね。今からなんてとんでもありません。その協会にホームレスが住み着いている可能性だってあります。いや、ホームレスならまだ良い方です。殺人犯や変質者に遭遇したら、幽霊に呪われる方が何百倍もマシでしょう。

僕はとにかく反論しようとして一度言葉を切り、再び口を開きました。坂本さんに先を越されてしまいました。

「でも約束したじゃないですか？嘘だったんですか？指切り、しましたよね」

僕は坂本さんが、そんな幼稚な言葉を発する人間であったことに、ひどく驚きました。さらに驚くことに、彼女は涙を流していたのです。

僕は狼狽しました。頭の中が真っ白になり、普段あんなにあれこれと考えていることが嘘のようでした。

「わ、分かった。一緒に行くよ」

僕は思わずそう答えてしまいました。答えた、と言うよりは口が勝手に動いた、と言ったが適切なのかも知れません。

僕の言葉を聞くと、坂本さんはサツと涙を引っ込めました。

さっきまでの涙は何だったのだろうか？ 演技なのか、それとも指切り、という儀式が坂本さんにとって特別な意味を持っていたのか、僕には分かりませんでした。

「本当ですか？ありがとうございます！早く行きましょう」

坂本さんはそう言うやいなや僕の腕を掴み、グイグイと引っ張りました。それは、とても強い力と言えるものではありませんでしたが、従わざるを得ない、不可抗力のような不思議な力でした。

「待つて、鍵を閉めないよ」

坂本さんが部室を出てからも、腕を引っ張り続けたので、そう言葉が発しないと立ち止まることができませんでした。

僕は、素早く部室に鍵を掛け、それをポケットにしまいました。

「ほら先輩、行きますよ」

坂本さんが、僕を急かし、再び腕を掴みました。

その声は、言葉とは裏腹にゆったりと流れてゆくようでした。また、この状況を楽しんでいるかのようにも聞こえました。よほどその教会に行くのが楽しみなのでしょう。

坂本さんに引っ張られながら廊下を通り、下駄箱を過ぎ、校門の桜の下をくぐり、コンクリートの道を歩きます。

以前坂本さんとこれらの道を通ったときは、もっとゆっくりと時間が流れていたように感じました。

しかし今回は、そのときよりも長い距離を移動しているはずなのに、空間移動したのではないかと思うほど、早く時間が過ぎました。「ここです」

坂本さんの呟くような声が聞こえます。それと同時に、さっきま

で感じていた腕の違和感がなくなりました。

僕はやっと、それまで坂本さんの方へ傾けられていた身体を真っ直ぐにすることができました。

顔を前方へ向けると、写真でしか見たことがない教会という建物が見えました。こざっぱりしていて、とてもお化け屋敷には見えませんでした。

「早く入りましょう」

坂本さんは、僕の方を見ながら言葉を発しました。

僕は教会という未知の場所に足を踏み入れることを僅かに躊躇いました。

学校へ向かうとき、近道をしようと思えばと普通段と違う道を通ろうと思っても中々実行に移すのは困難なものです。そのときと似たような感覚が僕を襲いました。

「先輩どうしましたか？　もしかして、怖いんですか？」

坂本さんはそう言いながら僕の顔を覗きこみました。

首を斜めに傾けた坂本さん、長い髪はもうすっかり冷たくなった秋の風に揺られています。

触れたら消えてなくなってしまうのではないか？そんな心配をしてしまうくらい、彼女は儂げでした。

「別に怖いわけじゃないよ、行こう」

僕は坂本さんの手を引き、教会の中へ初めて足を踏み入れました。

重そうに見えた扉は、思いの他簡単に、軋んだ音一つたてずにゆっくりと開きました。

中に入ると、外とは全く違った空気でした。外だけではありません。僕が今まで感じたどんな空気や、雰囲気もそれに当てはまりませんでした。

色とりどりのステンドグラス、細長い机、小さなパイプオルガン、十字架に磔けられたキリストの像。それら全てが初めて見るものでした。

そして、想像していたよりずっと綺麗な場所でした。机の上をそ

つと指でなぞってみても、埃はあまり絡みませんでした。公共の場所なので、きつと誰かが定期的に掃除をしているのでしよう。

月の光がステンドグラスを通して入り込み、僕はお化け屋敷にやっつて来たというよりは、見知らぬ街に迷いこんでしまった。そんな気分になりました。

「あんまり怖くありませんね」

坂本さんの退屈そうな声が響きます。教室で聴く放送より鮮明に近くで聴く僕に向けられた声より幻想的に聞こえました。

坂本さんは、自身の長い髪を耳に掛けながら、教会の奥まで足を進めました。

コツコツとローファーが床を叩く音だけが聞こえます。

「先輩！ 階段がありますよ」

ローファーの歩く音が止み、坂本さんの興奮した声が、美しく夜の教会に響きました。

僕はすぐに、彼女の側へ駆け寄りました。

「本当だ」

僕はため息混じりに言葉を返しました。下へ続いている階段の先は、暗くて良く見えません。

「行きますよね？」

坂本さんが楽しげに言いました。

振り返ると、口角を少し上げた自然な笑顔が見えました。

坂本さんは、躊躇っている僕を押し退け、階段を降りて行きます。ローファーが、冷たい石の階段に当たり、乾いた音を響かせました。

「ま、待ってよ」

僕は急いで、坂本さんの後を追いました。

そこは、暗い地下室のようでした。電気のスイッチを押すと、オレンジ色の光で周りの様子が分かりました。

階段を降りた先には扉があり、ドアノブには鍵が刺さったままでした。

僕の前方にいる坂本さんは、鍵には目もくれずにドアノブを捻り、

部屋へ入って行きます。

僕も坂本さんによって開けられたドアから、部屋に入りました。その部屋には灯りがありませんでした。ゆっくりと回る換気扇から、月明かりが射し込んでいるだけです。

「凄い場所ですね」

坂本さんはそう言いながら、部屋の中央に立ち、周囲を観察していました。

僕も、まさか一人で帰るといっわけにも行かないので、部屋の様子を見てみることにしました。

大量の画材道具。それが大半を占めていました。大きなイーゼルには、書きかけの風景画が置かれています。また別のイーゼルには、美術の教科書で見た、有名な人物画の模写もありました。

床には散乱した絵の具、水彩のものではなく、油絵に使うものです。筆も数種類落ちていました。

使い古したパレットは、薄い紫に近い、何とも形容し難い色を乗せています。

それらを見た僕は、ひどく懐かしい気分に浸りました。

というのも、僕は昔、油絵を描いていた時期があったからです。まだ学校のチャイムに馴れていなかった頃です。

小さなコンクールで佳作に選ばれ、図書館に飾られたこともありました。

当時の僕にとっての油絵は、一つの救い、でした。たくさんの友人と、自分の根本的な違いというものを、証明してくれているようだったからです。

友人達の中で、油絵を描く人がいなかったのも一つの原因なのかもしれません。美術の時間も水彩画の授業ばかりでした。

図書館に飾られた僕の絵は、他の誰にも描くことができない。

その事実が、家族や友人に誉められることよりもずっと僕を安心させ、同時に僅な優越感に浸らせてくれるものでした。

僕には、そんな遠い昔のことを思い出してしまうほど画材道具の

散乱した地下室は、とても特別な場所であるように映りました。

「あーあ、めちやくちゃ怖いって言うから期待して来たのに。大したことありませんね」

坂本さんの落胆した声が聞こえます。この部屋では、さっきのようには響かずに、固いコンクリートの壁に音が吸い込まれたみたい

に聞こえました。

僕は坂本さんに返事をしようと口を開きました。

「じゃあ……」

帰ろうか、と言おうとして、ふと坂本さんの方へ目をやりました。坂本さんは僕の方を向いていました。スカートを握りしめ、真っ直ぐな目をしています。ゆっくりと回る換気扇から射し込んでいる月明かりが、坂本さんを照らします。

僕はその様子を見て、初めて坂本さんにあつたときのことを思い出しました。

日本人形のような。

そう思った瞬間、僕は部屋から外へ出ると、鍵を回しました。

目の前の階段は、オレンジ色の光で照らされています。

その光に安心し、僕はドアノブから鍵を引き抜き、ポケットへしまいました。

チャリ、という金属同士の擦れる音が響きます。多分、部室の鍵と地下室の鍵が、接触した音でしょう。

僕は立ち去ろうと、ドアに背を向けました。オレンジ色に照らされた階段が見えます。

「先輩、ドアが開かないんですけど」

坂本さんの声が、背後のドアから聞こえます。

その声を聞いたとき、僕は久しぶりに笑いました。嬉しくて、笑ったのです。

こう書くと、僕が坂本さんに対して恋愛感情を持っている。だから、そんな異常な行動をしたのだ。と思う人がいても不思議はありません。

それは大きな間違いです。確かに僕は坂本さんのことが好きでした。しかしそれは、普通の人人間に対して抱く感情とは全く異なるものなのです。

例えば、僕はカニと寿司が好きです。ゲームが好きです。映画も好きです。それらと同じように坂本さんもまた、好きなのです。

真っ直ぐ腰まで伸びた黒い髪、それとは対照的に透けるような白い肌、長い睫毛、綺麗に通った鼻筋、薄い唇、今にも折れそうな細い指、ほどよい肉付きの足、長いスカートから少しだけ見える膝小僧、それらが好きでした。綺麗だから。美しいから。いつまでも見たい。そう思っていました。

好きなゲームのソフトは所有していたい、好きな作家の書いた、気に入っている小説は手元の本棚に置いておきたい。

それと同じように僕は、大好きな坂本さんを所有していたかったです。

当時の僕は、恋人と呼べる存在もいませんでしたし、誰かのことを好きになったこともありませんでした。だからそのときは、坂本さんに対する僕の異常なまでの独占欲を、恋愛感情によるものだと勘違いしていました。

僕は、坂本さんを所有することができた、という満足感と優越感に、しばらくの間浸りました。

ゆっくりと階段を上がり、教会をあとにします。

家路を歩きながら、僕はこれからどうしようかと考えました。

坂本さんは、あの部屋から脱出しようかと試みるでしょう。何か期限を付けようか？ そうすれば、それを諦めるかもしれない。

様々なことを思い巡らせました。無意識に顔が緩んでしまいます。それほど僕は、幸福な感情で満たされていたのです。ストックホルム症候群というものを期待していたのかもしれませんが。

それからの僕は、上機嫌でした。自分の好きな子を所有しているという感覚が、こんなにも気持ちの良いものだとは想像もつきませんでした。

次の日には、僕に良い考えが浮かんでいました。

坂本さんの絵を描こう。

どんなに素晴らしい考えだろうと思いました。

あの部屋には、たくさん画材道具がある。幸い、僕は丁度授業で油絵を描いていましたから、絵の具やパレットなど、あの部屋にはないものも自分で用意することができます。

四章 冬(4)

文化祭の後の数日間は、代休ということでしたが、僕は絵の具を取りに、学校へ向かいました。

僕は夜中の学校が嫌いでした。著しく生活感が欠如しているからです。

僕は、朝方の学校に忍び込みましたが、生徒や先生のいない学校は、僕にはひどく恐ろしい場所に映りました。

生徒達がせわしなく走り回る廊下、どうでも良い会話で騒がしい教室、コピー機が休むことなく動いている職員室、それらとは全く異なる空間は静まりかえっていました。

僕は、静かで明るい廊下を一人で進みます。普段は気にも止めない自分の乾いた足音が妙に耳に残ります。

誰もいない廊下……坂本さんと二人で歩いたこともありません。あときは、あんなにも遠かった彼女が、今はきつと、僕をあの地下室で待っている。

そう考え、僕はまた幸せを噛みしめるように、唇を歪めました。ゆつくりと階段を上り、二階の職員室を目指します。鍵なければ、美術室に入ることができません。

そういえば美術部の人は、文化祭のあと、ちゃんと鍵を職員室に返したのだろうか？ 僕のように、部室の鍵を返さず、ずっと所有しているような傲慢な人間だったらどうしよう。

僕はまだ、青田先生に頼まれて作った部室の鍵を渡していませんでした。

僕の手元には、二つの放送室の鍵があります。

職員室のドアを開き、誰もいないのに「失礼します」とつい話してしまいます。習慣というのは怖いものです。

職員室に入ると、真っ先にコピー機の隣にある、鍵が掛かった掲示板へ向かいました。

「美術室」の三文字を探します。

あった。

良かった、これで絵の具を取りに行くことができます。

きつと美術部には、僕のような傲慢な人間がいないのでしょう。いいえ、もしかしたら顧問の先生が鍵の管理にうるさいだけなのかもしれません。

僕だって青田先生が一言でも「鍵は？」と言っていれば、渡すつもりでした。

美術室の鍵を手にした僕は、「失礼しました」と言いながら丁寧にドアを閉めました。

廊下を少し進み、更に階段を上り、三階の美術室へと向かいました。

鍵を開け、ゆっくりと扉をスライドさせます。あの教会の扉を開けたときのよう、あっさりとは開きました。

僕は生徒達の画材道具が置いてある棚へと、足を進めます。

やっと目当てのものに辿り着ける。そんな高揚感からか、僕の心臓は早鐘を打ちました。

「これだ」

誰もいない美術室に、僕の乾いた声が反響します。

僕は自分の名前の書かれた画材道具を抱え、美術室をあとにしました。

美術室の鍵を締める「カチャリ」という音を聞いたとき、どういふわけか僕の頭には、坂本さんの姿が浮かびました。

早く行かないと。

そう思ったとき、先ほどまでは、ゆっくりと進んでいたはずの足が嘘のように早く回転しました。階段を一段飛ばし、ときには二段階飛ばしで駆け降り、最後の三段は一気に飛び降りました。

職員室へ走り、ノックも「失礼します」も言わず、震える手で鍵を戻します。コピー機に足をぶつけてしまいました。気に止めずに職員室を出ました。

「失礼しました」の一言も、すっかり忘れていました。それどころか、乱暴にドアを閉めてしまいました。

ドアの閉まる音は、静かな廊下に響いたことでしょうか、僕には自分の足音さえ聞こえていませんでした。僕の頭は、坂本さんのことしか考えていませんでした。

長い距離を走り、やっと教会に辿り着きました。

夜とは違い、不気味には見えません。どこかの国の童話に、登場してもおかしくない。そんな雰囲気でした。教会の中は、ステンドグラスが朝日を浴びて、綺麗な光が交差しています。

僕は、学生服のポケットから鍵を取りだし、ゆつくりと地下室へ続く階段を降りました。階段の軋む音が、僕のことであることを断罪しているように感じました。

階段の先の扉に、そっと鍵を差し込みます。美術室よりも軽く、あっさりと扉は開きました。

扉を開けると、絵の具の乾いた匂いが僅かに香りました。夜はよく見えなかった部屋の様子が、朝の光に照らされています。

画材道具しかないと思っていた部屋ですが、小さなベッドが部屋の隅にありました。ポツリと、そこだけが唯一生活感のある場所みにたいに見えました。

坂本さんはそこにいました。静かな寝息をたてています。

僕はゆつくりと彼女の側へ近付きました。

やっと僕のものになった坂本さん。一步一步と足を進める度に、心臓の鼓動が早くなってゆきます。

坂本さんの手は、真っ赤に染まっていました。きつとドアを開けようと、叩いたのでしょ。

ドアに視線を移すと、うつすらと血の痕が見えました。

僕は、学校から持ってきた画材道具を床に置き、部屋の鍵を閉め、教会を出ました。

そして、近くのコンビニで、消毒液やら包帯やら、食糧も買いま

購入したものの入ったビニール袋を下げ、僕はスキップをしながら坂本さんの居る地下室へと向かいます。スキップなんて何年ぶりでしょう、楽しくて仕方ありませんでした。

地下室に戻った僕は、部屋の様子を眺めました。坂本さんは相変わらず寝ています。きつと夜遅くまで、ドアを叩いていたのでしよう。

部屋には、ベッドと画材道具以外のものは見当たりませんでした。僕が出入口に使っていたドア以外に、もう一つドアがありました。開けてみると、シャワー室のようでした。

元々この部屋が、何に使われているものだったのか、検討もつきません。しかし、僕にとって都合の良い状況であることは間違いありませんでした。

僕は、相変わらず寝息をたてている坂本さんの手を手当てすることにしました。

換気扇から入る光に照らされている傷口に、消毒液を吹きかけます。軟膏を塗り、ガーゼを当てました。

坂本さんは、そうした作業の間ずっと眠ったままでした。傷口が痛めば、目を覚ましてもおかしくはないのに。余程疲れていたのでしょう。

僕はガーゼの上から包帯を巻きました。しっかりとガーゼを固定するために、きつく巻きます。そのときでした。

「痛！」

坂本さんが目を覚ましたようでした。包帯をきつく巻いたせいで起きてしまったのでしょうか？

少し心が痛みましたが、仕方ありません。僕は包帯を最後まで巻き、テープで留めました。

「大丈夫、ですか？」

僕は、できるだけ落ち着いた声を出すように心掛けました。それでも声は震えてしまします。坂本さんに嫌われてしまうのではないか、という恐怖心からです。

「あの、先輩。どうして鍵を閉めたんですか？」

坂本さんは強い口調で、僕を詰りました。目は怒りで満ち溢れ、僕だけを見ています。

僕の心は、坂本さんに嫌われてしまったという絶望よりも、坂本さんの視線が僕だけに向かっている事実に対する幸福の方が勝っていました。

学校でしか会うことのできなかつた坂本さん。周囲には、たくさんの友人がいます。僕のことなんて、これっぽっちも見えてはくれないのです。

そんなにも遠かつた坂本さんは、僕だけを見てくれている。この狭い地下室には僕しか話す相手がいないのだ。そう考えると、自然と口がニヤけてしまいます。

「何笑ってるんですか？ 答えて下さい」

坂本さんは、僕の手を振り払いました。身体を起こし、警戒するように僕から離れます。

「……絵を描きたいのです」

僕は小さな声で、呟くように言いました。坂本さんの同情を誘うための演技です。顔を少し下に向け、できるだけ弱々しく話しました。

「絵って、描いたら良いじゃないですか」

坂本さんは、そんな僕の様子の変化に、少しだけ戸惑いを見せました。けれど、相変わらず僕から離れたままで、口調は怒っているようでした。

「……坂本さんの絵を、……ここで描きたいのです」

僕の、この言葉を聞いて坂本さんは何を思ったのでしょうか？ あまりにも現実感がない状況に、混乱していたのかも知れません。

彼女は、ひどく狼狽した声を発しました。

「だからって、閉じ込める必要は無いと思うんですが」

声がひっくり返り、今にも泣き出してしまいそうでした。

きつと、僕の坂本さんに対する異常なまでの感情に、気が付いた

のかも知れません。

坂本さんは、頭の良い人間でした。その場でガツクリと膝をつき、疲れたような弱々しい声色で言いました。もう、初めのような強い口調ではありませんでした。

「いつ、描き終わりますか？」

僕は顔を上げました。坂本さんが、こんなにすんなりと諦めてくれるとは予想外でした。

もしかしたら、坂本さんは僕の変態性までも、感じ取っていたのかも知れません。僕のことを頭のおかしい人間だと、瞬時に判断したのかも知れません。どちらにしろ、できるだけ穏便に話を進めようとしたようでした。

「一週間は、掛かると思います」

僕は、努めて冷静な声を出し、自分はまともな人間であるということ、他でもない自分に主張するように答えました。

「分かりました、じゃあ一週間でここから出すと約束して下さい」
坂本さんは、鋭い目線で僕を睨み付けながら言いました。そして、ゆっくりと小指をこちらへ突き出しました。怪我をしていない左手です。

正直な話、少しどきりとしてしまいました。

恐ろしくて竦み上がったわけではありません。『萌え』というものでしょうか？ 上目遣いの坂本さんは、今までには感じたことのない幼児性がありました。僕は小児性愛者ではありませんが、もし坂本さんの年齢が著しく若くても、きつと同じことをしたでしょう。僕は坂本さんにゆっくりと歩みより、突き出された小指に自分の小指を絡めました。いつかの涼しい夏のように。

もちろん、絵を描き終えても坂本さんを解放する気は微塵もありませんでした。せつかく手に入れたものを手放したりする人間など、存在するはずがありません。僕はただ、坂本さんに小指の先だけでも触れたかったのです。

以前は指の感覚なんて、全く分からなかったのに、今回はどうい

うわけか、ひどくりアルに指の感覚が伝わって来ました。

間接と間接の間に絡まる指。今までにないくらい、指の神経細胞が使われているように感じました。指切りという、ごくありふれた儀式のはずなのに、何だか卑猥な言葉に思えます。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ーます」

殺風景な地下室に、僕達の声だけが響きます。ふざけているわけではないけれど、リズムを付けて儀式の言葉を発しました。

指切りをすると、坂本さんはパツと絡めていた指を離しました。

「それじゃあ描いて下さい」

僕が美術室から持ってきた画材道具を押し付けながら、ぶつきらぼうな口調で話します。

僕は黙ってそれを受け取り、部屋にある適当な大きさのキャンバスを持ち出し、新しい布を張りました。近くにあった椅子に座り、いつもの美術の時間と同じように坂本さんを描いてゆきました。

僕が無言で手を動かしている間、坂本さんは僕がコンビニで買ったきた食料を食べていました。

ビニールから取り出したパンを口に入れていただけだというのに、フランス料理のフルコースを食べているような優美な食べ方でした。長い指で器用にパンを千切っては、小さく開いた口にせつせと運んでいます。口に含んだパンをしばらく咀嚼している間、薄い唇が微かに動きます。

あの唇に近付けたらどんなに良いだろう。ほんの一メートルの距離しかないけれど、僕は見つめていただけで胸が締め付けられるほど幸福でした。この様子は僕一人しか見ることができない。その事実が重要なのです。

どんな構図で描くかはもう決まっていましたから、僕はパンを食べる坂本さんを見ながらも、キャンバスには全く違った坂本さんを描いていました。

キャンバスに描かれるのは溢れんばかりの笑顔の坂本さん。完璧な想像で描きました。人物がを描くのは苦手でしたが、絵の中の坂

本さんは僕だけを見て笑っていました。

どれほど時間が経ったのか全く検討がつきません。気が付くと換気扇から漏れていた光は、弱々しいオレンジ色に変わっていました。僕は荷物をまとめると、坂本さんに「明日来ます」とだけ告げドアを閉めました。もちろんドアに鍵を閉めるのを忘れずに。

家路につきながら時計を確認すると、まだ早い時間であることが分かりました。冬は日が落ちるのが早いのです。

家に帰ると、母が僕に話し掛けました。

「おかえりなさい。あ、ねえ、ちよつと知ってる？ 一年B組の……誰かは知らないけど、行方不明らしいわよ。もう最近の子は何考えてるか分からないわ」

大方連絡網で知ったのでしようが、母はテレビドラマを見ながらまるでどこか遠くの国で起こった出来事のように言いました。母にとっての『最近の子』とはいったい誰のことなのでしょう？ 僕は反抗期というものが不思議となかったものですから、現実味を感じないのかも知れません。

警察が調べるのも時間の問題ということは分かっていました。が、どういうわけか僕にはあの地下室が警察に見つからないという確信がありました。なぜかは分かりませんが、そう感じたのです。

「そうだね、じゃあ僕宿題あるから」

僕は自室へ続く階段に足を掛けながら、曖昧に答えました。

僕はいつだって曖昧なのです。ふらふらと、適当に生きていたから曖昧な答えしか言うことができないのです。だから反抗期なんて労力を使う時期は一切来なかったのだと思います。

母は僕の曖昧な答えに馴れていますから、適当な返事をして、テレビドラマを見続けました。

僕は自分の部屋で、教科書を広げました。さすがに宿題を終わらせないわけには行きません。坂本さんがしたように、シャープペンシルをくるりと回してみます。勢いのついたシャープペンシルは半回転し、僕の指先へ戻ることなくノートの上に落ちました。僕はそ

れを拾わずに、自分の左手を眺めました。数時間前に坂本さんと指切りをした左手。

「あーあ、右利きだったら良かったのに」

僕はため息の代わりに意味もなく大きな声で、伸びをしながら言葉をつき出しました。

四章 冬(5)

文化祭による代休も終わり、学校へ向かいます。たった三日ほどの休みだったのに、その頃にはコンビ二に寄り、絵を描くという生活がすっかり定着していました。

学校では坂本さんが失踪したという事件で持ちきりでした。臨時の全校集会まで行われ、クラスでは坂本さんを最後に見た時刻を問われました。

僕は同じ放送部ということで、先生に坂本さんを見た時刻をしつこく問われました。もちろん本当のことを言うわけにはいけないので、「文化祭の日には会っていない」と言い続けました。

信じてもらえたかどうかは分かりませんが、僕よりも青田先生のほうが疑われていました。

僕はあの日、坂本さんと一緒に下校したのを誰かが目撃したのではないかとヒヤヒヤしましたが、誰もそんな目撃証言はしませんでした。

坂本さんがいないので、僕は朝の放送も担当することになりました。

学校に坂本さんがいないことが、嬉しくて堪りませんでした。僕以外の人間に笑顔を向けたり、話し掛けたりしないのですから。こんなに素晴らしいことはありません。

僕は放課後の放送を友人に頼み、授業が終わると坂本さんの絵を描きに行くことが楽しみになっていました。

しかし、楽しい時間というもの長くは続かないのです。

「もうすぐ一週間ですね」

坂本さんの嬉しそうな声を聴きながら、僕は黙って筆を走らせました。

「学校では、話題になってますか？ でも、プチ家出したことにするんで大丈夫ですよ」

坂本さんは本当に頭の良い人間です。何でもない口調で、本当のことを話さないと暗に主張していました。

「どうして……」

僕は、坂本さんを解放するつもりは一切ないのに、日々明るくなってゆく彼女を見るのが辛くなりました。

「どうして、嘘を疑わないの？」

僕は嘘をついている。普通の人間ならそれをまず疑うべきなのです。

坂本さんにとって、『指切り』という儀式は『絶対』なのでしょうか？

僕の言葉を聞いた坂本さんは、びっくりしたような、唾然としたような、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしました。そのあと、ゆっくりと僕の方へと歩み寄ったのです。

僕は、坂本さんの方から近付いてくれたことに、思わず頬を緩めてしまったのですが、彼女は僕の横を素通りし、扉を開け放ち、地上へ続く階段を登ったのです。

「坂本さん……！」

僕は咄嗟に坂本さんの後を追いました。彼女の細い腕を強い力で掴み、引き寄せました。

そこからは全てがスローモーションみたいでした。彼女はバランスを崩し、数分間宙に舞っていました。実際はほんの一瞬の出来事なのでしようが、長い黒髪が綺麗に風になびき、白い肌は輝いて見えました。

『綺麗だ』そう思ったあとのこと。それまでスローで動いていた世界が、現実味のある、普通の速度に戻りました。

ガタガタと大きな音をたてながら、坂本さんは階段を転がってゆきました。

僕は、ひどく狼狽しました。坂本さんは、頭から少量の血を流しピクリとも動きません。

死んでしまったのだろうか？

「僕は、悪くない」

うわごとのように、僕はそう繰り返しました。そのときの僕は、冷静な判断力というものが欠如していたのだと思います。救急車を呼べば良いものを、どういうわけか、あの画材道具のある鍵のある地下室へと、動かない坂本さんを運びました。

本当に、何を考えていたのか正確には思い出せません。ただ、僕は坂本さんを監禁し始めてから、彼女を地上へ解放するつもりがなかった、ということだけは事実です。

僕はゆつくりと、坂本さんをベッドに寝かせました。そして、彼女の口唇に自分の唇を押し当てました。

何も感じませんでしたし、何も思いませんでした。覚えているのは、薄い唇の氷のような冷たさだけです。

僕はゆつくりと坂本さんの心臓に耳を当てました。動いています。それを確認したとき、僕は大きなため息をつき、がっかりしました。

……死んでいたら良かったのに。

そんな気持ちでいっぱいでした。もし、死んでいたら僕が直接手を下す必要が無いからです。

僕は手元のイーゼルを手に取りました。大きく、重量があります。罪悪感を消すために、まず顔をつぶしてしまおうと思い、大きなイーゼルを振り上げ、何度も何度も坂本さんの顔に振り下ろしました。

人間の顔は、思ったよりも硬いものでした。表面はぐにやりとした感覚でしたが、叩いたときの音は、鈍く耳に響くものでした。

坂本さんの顔は、だんだんと造形が崩れ、一部からは骨のような白くて硬そうなものが見えてきます。片方の眼球も潰れたのかどうかは分かりませんが、陥没しているようでした。

顔が崩れてくるのと比例するように、血がかなり出ました。最初は頭のほうから少しだけ流れているかどうかというくらいでしたが、鼻が折れたときから、溢れるように、次から次へと出てきました。

そんな状態になっても、坂本さんは美しかったのです。僕は、眼鏡をしていて良かったと思ったことはこれが始めてかもしれません。目に血が入ってしまったのは、坂本さんの様子を見ることが困難になるからです。それに、目に異物が入るのは気持ちの良いものではありません。

医療系ドラマの手術シーンでは、ドバドバと血が出るシーンがあります。それに通じるものがありました。

僕が坂本さんを殴っている間、彼女はピクリとも動きませんでした。抵抗されたら、決心が鈍るというものですから、僕は自分の幸運に感謝しました。

顔の形が分からなくなってくると、僕は安心しました。

血まみれのイーゼルを床に置き、改めて坂本さんだった物体を眺めます。換気扇から刺し込む月明かりが、とても美しかったのを覚えています。

簡単には割れないはずの頭蓋骨が割れ、中から脳のようなうねうねとしたものが見えました。教科書や、人体模型で見る脳よりも、目の前のそれは気持ちの悪いものでした。

てらてらと赤く輝く血で染まった脳。確か、海外では猿の脳を食べるといふ話を聞いたことがあります。目の前の気持ちの悪いそれも、もしかしたら食べることができるのかも知れない。

始めは、気持ちが悪いと感じた坂本さんの脳ですが、ぼんやりと眺めているうちに、ひどく幻想的なもののようにも思えました。

僕はそれを手に取りました。金属の匂いが鼻につき、ベトベトと手にまとわりつきます。

その頃にはもう「気持ちが悪い」などとは思いませんでした。

僕は手に取った坂本さんの脳を、ゆっくりと口へ運びました。

味は、血の味しか分かりませんでした。金属を舐めているときのような味です。そして次第に、コリコリとした感触が口に広ってゆきました。

しばらくの間、僕は目の前のそれを咀嚼し、また嚥下する動作を

繰り返しました。

第三者から見たら人間の脳を学生が貪っているという信じられない光景でしょうが、僕は表現できないほどの、満足感で満たされていました。

そして僕は、坂本さんの心臓が動いていないことを確認すると、坂本さんの笑顔が描かれた血まみれになった絵を見つめました。

ほとんど完璧だと自分では思っていました。血で汚れてしまいました。

僕はそれを見て、妙な焦燥感に駆られました。複製しようと思えば簡単にできたのですが、そうはしませんでした。

僕は目の前の光景をその絵の上に塗り重ねたのです。

もちろん食べ散らかした脳は、理科の教科書にあるようにぼかして描きました。一心不乱に描き、気が付くと朝の光が差し込んできました。

その光は僕を断罪しているようでした。僕は一目散に逃げました。走って、走って、やっと自分の部屋に辿り着いたとき、ほっとしました。

学生服が黒くて良かった……、返り血でほとんど使い物になりません。もったいないですが、僕は新しい制服を購入しようと心に決めました。

僕は坂本さんを監禁し、そして殺しました。

僕は、坂本さんが好きだから監禁したわけではありません。好きだから、自分のものにしたかったから殺したわけではありません。

坂本さんを殺した理由は簡単です。世間にバレルのが怖かったのです。警察に逮捕されるのが怖かったのです。

テレビ番組で特集を組まれるのが嫌でした。小学生のときの卒業アルバムの写真が出回るのは耐えられません。

僕が殺人犯になったその日から、周囲の人間は敵でした。まるで別人のように思えました。

僕は、新しいクラスになってから、友人を作らず、人間を遠ざけました。それは全て、自分の精神を守るためです。

坂本さんの生首を描いた絵は『断罪してください』というタイトルをつけ、美術室で完成させました。家で描くわけにもいかないし、かといってあの地下室で描く気も起こらなかつたからです。完成した絵は美術準備室に置きました。どういうわけか、それはコンクールに出され、賞をとりました。きっと美術の先生が勝手に行ったのでしょう。

絵が市役所に飾られたと知ったとき、僕は誰かに感づかれるのではないかと心配しました。しかし、坂本さんの死と僕の絵を関連付けた人物はいないようでした。ただ一人、友人の卓君は感づいているような素振りを見せていましたが、僕は気が付いていないフリを一年間続けました。

この文章は、文化祭の日には完成していましたが、もう少しだけ学生生活というものを味わっていたくて、二ヶ月ほど遅れてしまいました。僕は我が儘な人間です。

僕は自分の罪を償うつもりです。

自殺などではありません。自首します。

もちろんそんなことで、坂本さんが生き返るわけではないことは分かっています。

報道され、揶揄される僕に同情してはいけません。ただ僕を笑ってください。

皆さん、ここまで聞いて下さりありがとうございます。

私は、そこまで読むと激しい脱力感に襲われた。力のこもらない指でマイクの電源を落とす。

坂本さんの名前が出始めた頃から、部室のドアを激しく叩く音が聞こえ始めた。もうかれこれ三十分は、ドアを開けようと頑張っ

いる。

確かにこんな内容の台本を、全校放送で流したら反省文どころじゃ済まないだろう。

私は苦笑しながら、手元にある二つの放送室の鍵を眺めた。一つは先輩の、もう一つは私がいつも持っていたものだ。そして、手に持った台本をパラパラと捲った。

うるさいドアに背を向け、窓から外に目をやる。

十一月にしては早い、粉雪が降ってゆくのが見えた。

今年はホワイトクリスマスになりそうだ。

四章 冬(5)(後書き)

最後までお読みくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0465q/>

断罪してください

2011年8月29日03時39分発行